

# 多文化と介護

## 2026 VOL. 3

## MULTICULTURE AND SOCIAL CARE

### CONTENTS

#### 巻頭特集

外国人介護人材と育成と課題—2025年の視座—

占部琢巳・牧貴太・奥田領太・水口岳信・

馬込武志・傘郁子・伊藤美加子——1

#### 原著論文

食事介助動画を使用した介護職員による注視点計測研究

伊藤美加子・後藤彰彦・藤田杏純実——22

#### 実践研究

介護福祉学科における生物学教育の意義と共通言語としての日本語の役割

傘郁子——36

#### 資料

不登校児童生徒および保護者への支援内容の評価 — For Everyone Study のアンケート調査、活動資料の分析から —

山田克宏——45

#### 年報

——54

# 多文化と介護 2026 VOL. 3

---

## CONTENTS

### 巻頭特集

外国人介護人材の育成と課題—2025年の視座—

占部琢巳・牧貴太・奥田領太・水口岳信・  
馬込武志・傘郁子・伊藤美加子・石鍋浩——1

### 原著論文

食事介助動画を使用した介護職員による注視点計測研究

伊藤美加子・後藤彰彦・藤田杏純実——22

### 実践研究

介護福祉学科における生物学教育の意義と共通言語としての日本語の役割

傘郁子——36

### 資料

不登校児童生徒および保護者への支援内容の評価 — For Everyone Study のアンケート調査、活動資料の分析から —

山田克宏——45

### 年報

——54

---

# CONTENTS

## Roundtable Discussion

Training and Challenges of Foreign Care Workers: Perspectives for 2025  
Takumi URABE, Takahiro, MAKI, Ryota OKUDA, Takanobu MIZUGUCHI, Takeshi MAGOME,  
Ikuko KARAKASA, Mikako ITO, Hiroshi ISHINABE——1

## Original Articles

A study on gaze points measurement using video of meal assistance scene in nursing home

Mikako ITO, Akihiko, Asumi FUJITA——22

## Practical Research

The Significance of Biology Education in Care and Welfare Studies  
and the Role of Japanese as a Common Language

Ikuko KARAKASA——36

## Technical Information

Evaluation of support for homeschooled children and their guardians: Findings from  
the For Everyone Study questionnaire survey and analysis of activity materials

Katsuhiro YAMADA——45

## Annual Report

——54



## 巻頭特集座談会：外国人介護人材の育成と課題－2025年の視座－

日本の介護現場では外国人と日本人と協働する時代がすでに始まっていますが、課題も山積みです。このような現状を受け、本誌第1号巻頭言では「…しかし、この課題はネガティブに捉えるべき課題ではありません。むしろ、日本の介護に新たな風を吹き込む起爆剤になりうると、我々は信じています。」と述べています。

「よりよい介護の実現のために、多文化の視点はこれからますます重要なポイントになるはずです」との考えに基づき本誌「多文化と介護」も第3号を発刊する運びとなりました。

本号では、日々外国人と接している介護現場のスタッフの方々と養成校教員との座談会の場を設け、外国人介護人材と育成と課題について語り合っていました。外国人との出会いから始まり、外国人のバイタリティ、そして2025年から未来に向けた展望など興味深い内容となりました。

### 座談会参加者（敬称略）

- ・ 特別養護老人ホーム 称揚苑 サブチーフ 占部琢巳
- ・ 介護付き有料老人ホーム グラート大今里 サブフロアチーフ 牧貴太
- ・ ファイン舎利寺 介護型 住宅型有料老人ホーム ケアマネージャー 奥田領太
- ・ グループホーム瑞光別邸 チーフ兼管理者 水口岳信
- ・ 東大阪大学短期大学部介護福祉学科 教授 馬込武志
- ・ 東大阪大学短期大学部介護福祉学科 教授 傘郁子
- ・ 東大阪大学短期大学部介護福祉学科 教授 伊藤美加子
- ・ 司会：東大阪大学短期大学部介護福祉学科 教授 石鍋浩

## 本座談会の狙い

・・・留学生、それから外国人を取り巻くことについて、意見交換しながら、良い点も悪い点も、探っていければと。現時点での我々の問題意識として、これ多分10年後とかにはそれなりの良い記録として残るんじゃないか

司会：今日はお忙しいところお越しくださいますありがとうございます。こちらお配りしたんですけど、こういう形で私たちの学科で、国際介護福祉学研究センターというセンターも持っております、そこで一年に1回こういう形で雑誌として研究成果を発表したりとか、あと学生の活動とかですね、いろいろ発表したりしています。今回はこの巻頭企画として、座談会という形で、特に留学生、それから外国人を取り巻くことについて、養成機関の教員と、それから実際施設で外国人と関わっている方々といろいろな意見交換をしながら、良い点も悪い点も、探っていければと。現時点での我々の問題意識として、これ多分10年後とかにはそれなりの良い記録として残るんじゃないかなと思っています。今日はよろしく願いいたします。それでは、教員の方から。

馬込：簡単に、介護福祉学科の馬込と申します。どうぞよろしく願いいたします。

伊藤：介護福祉学科の伊藤です。よろしく願いいたします。御法人は以前19年ほど勤めさせていただいております、入職1年目の頃に見ていた方がこんなふうにな、管理者になられているのが本当に嬉しい限りです。よろしく願いいたします。

傘：介護福祉学科の傘と申します。よろしく願いいたします。

水口：グループホーム瑞光苑別邸の管理者をしております、水口と申します。よろしく願いいたします。

占部：称揚苑の管理者をしております、占部と申します。よろしく願いいたします。

牧：介護付き有料老人ホームグラート大今里でサブフロアチーフをしています。牧と申します。

奥田：有料老人ホームのファイン舎利寺で勤務しています。奥田と申します。よろしく願いいたします。

## 外国人との出会い

…外国人に対して何言ってるかわからないのではないかとか、日本の文化は知らないのではないかとか、コミュニケーションが取れないのではないかってずっと思っていたんですけど。ここに来たら全然取れるので、…。

司会：この場では全員さん付けでいければと思います。先生とかなんとかっていうのはあれなので。まず外国人を取り巻く状況っていうところなんですけれども、それぞれの方で、最初に留学生とか外国人スタッフとの出会いの時っていうのがあったと思うんですけども、いつどのような形で出会ったかというのを、じゃあそうですね、水口さんの方から。

水口：最初の出会いとなると、本当に、10年ぐらい前に。まあ、慶生会の方で、最初に受け入れたの中国の国籍の方だった認識なんですけど。ええ、介護士ではなくて看護師を目指される。海外の方をお受け入れして、その看護資格を取るまでの間については介護現場で学んでいただくという形でお受け入れされたのが認識としては、あります。

司会：それはEPA？

水口：その当時が私も本当に介護現場のうちスタッフだったので、深いところまでは。

伊藤：中国で確か看護師の資格を持っていて、その方を日本で、介護をしながら看護学校に入学できるように日本語教育をしてという形で、法人内で看護師を育成しようというプログラムでした。

司会：じゃあ10年ぐらいのお付き合いですかね。はい、ありがとうございます。じゃあ占部さんに。

占部：僕もまだ現場職員だったので、そこまで詳しく把握しているわけじゃないんですけども、同じく看護の方も、まあ介護士の方もいらっしゃるんですけど、なんかその資格をこちらがしてってというような形で来てはりましたかね。はい。あんまりそこまで本当に詳しくは分からないんであれなんですけど。

司会：まあ、だいたい何年ぐらい、10年ぐらい前ぐらいから...

占部：まあ自分でも8年なんですけど、その頃には数人ほどはいたのかなとは。

司会：...関わりがあるはい、ありがとうございます。じゃあ、えっと、牧さん、いかがでしょうか。

牧：水口さんと同じく、5年ほど前に看護師を目指してという形で中国の方と出会ったのが初めになります。そこからは少し経って、ベトナムの方だったり、ミャンマーの方だったりというところで関わりをしていましたね。

司会：はい、ありがとうございました。じゃあ奥田さんいかがですか。

奥田：10年前の、ちょうど称揚苑っていう施設の開設の時に、今勤めている中国の看護師の方が一緒に勤務させてもらって...

司会：国で看護師の資格を持ってて、日本に来てから介護職として...

伊藤：介護職をしながら看護学校の受験をして、看護の資格を取った。

司会：ああ、なるほど。そうすると介護に関しては、もう少しその後という形ですか

奥田：あんまりなんか介護を、そういう話したりとかはなかったんです。

司会：そうなんですね。はい、ありがとうございます。傘さん、いかがでしょうか。外国人との留学生との出会い....

傘：留学生との出会いですが、今まで勤務した学校では、必ず留学生がおりました。ただこの学校に来てから、初めて深くいろいろなことを話すようになりました。前からそんなに日本人と留学生の違いは感じられなかったのですが、本学に就職して、留学生の素晴らしさを感じるかなと思っています。

司会：そうすると、まあ、本格的には本学に来てからですね。はい。伊藤さん、いかがでしょうか。

伊藤：私はこの大学の前の専門学校でも留学生がおりましたので、学生、留学生と関わったのはちょうど今で7年目になります。まず感心するのは、国を出て、知らない国に来て、その言葉を使って勉強して資格を取ろうって思えるそのバイタリティが素晴らしいなっていうのを感じているし、留学生からもらえるエネルギーは、今もいいものを得られているなと思っています。

司会：はい、ありがとうございます。馬込さんいかがでしょうか。

馬込：留学生は学生、先輩として大学院にはいたりとかっていうことはあったけど、教えるっていうのはここが初めてだから4年前の初め、僕はアレルギーがあったから、外国人に対して何言ってるかわからないのではないかとか、日本の文化は知らないのではないかとか、コミュニケーションが取れないのではないかってずっと思ってたんですけど。ここに来たら全然取れるので、あれみたいな感じで。今はもうまあ、留学生と日本人と一緒にとは僕は言わないけれども、むしろ日本人より留学生の方が多いので、あの留学生メインに授業しちゃうっていうところがあって、日本人が逆に置いてきぼりになるのがちょっと僕の問題ですね。

## 外国人の優れているところと課題

…まあ意欲の高い方が多いなっていうのは感じてます。自分が海外に行って、じゃあそこで働いてくださいねって言われた時に、自分ではできないだろうなっていう、その本当にパワーっていうのはすごいなって感じますね。

…やっぱり文章で書くことであって、その申し送りの連絡の行き違いや、その辺がやっぱりうまく伝わってなかったっていうのがあるんですね。

司会：はい、ありがとうございます。我々は留学生を受け入れて、養成の方で日々やってるんですけど、皆さんは職場の方では外国人のスタッフと接点がある方々だと思うんですけども、外国人スタッフの優れているところって何か感じているところありましたら教えていただきたいのですが、水口さん、いかがでしょうか。

水口：伊藤さんもおっしゃられたエネルギーというかですね、その異国に来て、まあ目的はね、様々だとは思いますが、自分の国に介護の知識を持って帰ろうと思っている方もいらっしゃるれば、本当にお金を稼ぐためっていう方もいらっしゃると思うんですけど、異国に来て、その国の言葉を使って働いて、かつ今働いていただいている方であれば、法人として JLPT ですかね、日本語検定をとっていかうねっていう動きがありまして、それに対してもまあ、前向きに取り組んでいましたし、その先にもやはり介護福祉士の資格を取っていかうねとか、実務者研修うまく取ろうねっていう、まあ意欲の高い方が多いなっていうのは感じてます。自分が海外に行って、じゃあそこで働いてくださいねって言われた時に、自分ではできないだろうなっていう、その本当にパワーっていうのはすごいなって感じますね。

司会：はいはい、ありがとうございます。逆に課題とかって何か。

水口：課題については、これ一概にその海外の方って全般的に言えることではないんですけど、やっぱりその背景としてめちゃくちゃ本当に事実として頑張ってるんだけど、その頑張りが自己評価としての頑張りが強くなってしまって、いろんな課題がやっぱり日本で働く上であるとは思いますが、そこがこう、伝えても、いや、私はやっていますよっていう、この自己評価と、今、介護の現場として働くっていう上での課題とのこのギャップがちょっと

生じやすいのかなって。まあ、それをどう解消していくかは、指導者側であったり、受け入れ先側の課題だなとは思いますが。

司会：はい、ありがとうございます。占部さん、いかがでしょうか。まあ、優れているところで。

占部：みなさんおっしゃったように、日本に来て、働いていて、そのエネルギーが本当にすごいなと感じておりましたし、本当に一生懸命取り組んでくださっています。逆に課題っていうのは、人それぞれがあるんですけども、どうしてもやっぱり日本語でつまづく職員かなりこういったところでは、その今おっしゃっていたこちらの試験を受けたりとかっていうところに・・・

司会：はい、ありがとうございます。牧さん、いかがでしょうか。

牧：バイタリティはもちろんのこと、やっぱりここに来て、文化を吸収しようとする意欲や、姿勢っていうのはすごいなとも感じます。お年寄り、高齢の方を介護するにあたって、やっぱり今使わない日本語、あまり若い人が使わない日本語だったり、実際、僕らでも馴染みがないような歌っていうのを調べて、業務の中で一緒に歌いましょうっていうふうに声をかけてくださったりとか、そういうのを見ていて、すごくこちらが勉強になるなっていうのは感じていたところです。

司会：逆に課題は何かありますか。

牧：課題に関しては、占部君もおっしゃったんですけど、日本語の少し細かい部分までが、伝えられない、こちらとしてもそのスキルがないせいもあると思うんですが、細かい部分まで伝わらないせいで、例えば身体介助において、このご利用者目線で安楽な介護を目指したときに、比べるわけではないですが、日本人スタッフであれば少し伝わりやすいところが、なかなか日本語として伝わらなかったり、ちょっと意味を取り違えて覚えてしまっていたりとかっていうのが散見されました。

司会：はい、ありがとうございます。奥田さん、いかがでしょうか。

奥田：意欲、皆さんがおっしゃったように高い方が多い印象がありますので、慶生会のマイスターという、資格があるんですけど、それを自らこれ受けたいですとかおっしゃる方もいますし、そうですね、意欲的に動いてくれる印象があるんで、ご利用者様からもすごい頑張ってるねとかいう、日本人より、お声を結構聞いてたりします。すごい頼もしいので。

司会：課題だな、みたいなのはありませんか。

奥田：そうですね。やっぱり文章で書くことであって、その申し送りの連絡の行き違いがるとか、その辺がやっぱりうまく伝わっていなかったっていうのがあるんですね。

司会：はい、ありがとうございます。今いろいろ、相当いい評価で、すごく意欲的というのをかかってくださっていて、逆にそのいくつか課題っていうのが出てきたんですけども、良い連携ができれば養成機関とそれから施設とですね、そういうところで養成機関にいる間に何か課題解決できるかなとか思ったんですけど、教員側から今何か聞いたところで、特に自己評価高すぎる。自己肯定感があっているところはあるんですけども、そこらへん馬込さんいかがでしょうか。

馬込：自己主張がちゃんとしてるんですよ。自分でやったと思ったことはやって伝えてるし、人にもよるけれど、やっていないことはやっていないってはっきり言うので、はっきりしてるっていう点はよくわかる。日本人みたいに何かどっちつかずのことは言わないので。その点では、その肯定感の話とかで言うと、確かに自己評価とかね、そういうところかなと思いますね。

司会：できてないけどできてる？

馬込：自分ができていると思うかどうかですね。できていないって僕たちが思うのは、基準が違うからそうなるんで、本人たちの基準ではできている、あるいはやったことなのでやった、できた、だから正直ですよ。本人たちの基準でできていないことはやっぱりできていないとかやっていないって、はっきり言うので。時々嘘をつく人はいますけどね(笑)。

司会：そこらへんのところがまた、もしかしたら文化的な違いなのかなっていうところですよ。

馬込：そうですね。日本人だったら遠回しに言ったり、やったのかやっていないのかが微妙だったりとか、この部分はやったけど、この部分はやっていないけど、これをどう言うかっていうのがすごく丁寧な言い方してくるけれど、外国人たちはスパーンって竹を割ったみたいにお話しされますね。

司会：はい、ありがとうございます。教員側から見てですね、優れているところとか課題っていうところではどうでしょうか。

馬込：優れているところは、逆に日本の文化をもろともしないところ。おもんぱかるとか、悪い意味でおもんぱかったりとか、逡巡したりとかっていうのはないので、さっき言ったみたいにはっきりしてたりとか、いろいろするんだけれども、あの逆に課題としたら、あれですかね、あの、もうちょっとこう、聞いてほしいような気はしますけど。自分がこうだったらもうそこからは入らない自分が正しいって思ったら、もうそこからはもういくら「いやそうじゃなくてね」とかって言っても、いやもう正しいんだって言っても説が曲がらないので人にもよるけど。聞く耳持ってほしいなっていう柔軟性というところがちょっと弱いのかなという気はしますね。こんな感じでいかがですかね。

司会：それってなんか国によっての傾向とかって感じますか。

馬込：うーん、若干感じますかね。...でも、ほぼそうですね。

司会：伊藤さんいかがでしょうか。

伊藤：優れているところ。優れているは、自分の考えとかね、はっきり言えるし、さっき言った自己肯定感も高いし、自己評価もしっかり高いんだけど、裏を返せば相手の立場に立って何かを考えると、介護って一番必要じゃないですか。利用者さんの立場になって、その人が今必要なことは何かと

か、ちょっと考えるときに、こう自分の中の軸でこれができないんだからもう仕方ないよねとか、もうやらなくていいよねとか、思ってしまうというのは感じますかね。スパッと、こう切り捨ててしまうというか、さっき言ったおもんぱかるっていうのが難しい子が多いかな。それは訓練が必要かなと思います。

司会：傘さんいかがでしょうか。

傘：私は意外と思ったことがあります。最近まで把握していなかったことです。留学生の多くは「日本語わかります。聞き取れます」と言います。ところが、この「聞き取り」が意外とできていないことがわかりました。確かに日常的に頻繁に出てくる会話・文章などは正しく聞き取っていますが、少し話の内容に変化があると、平易なわかりやすい内容でも、留学生には難しいようです。母国語で話す頻度が高いことに原因があるように感じています。もっと日本語を話してほしいので、こちらも話しかけています。

## 外国人の日本語レベル

介護の専門的な用語という部分にはまだまだ壁があるような感じがします。

…確かに専門用語は言えばわかる。それが難しいのではなくて、例えば、介護の現場で今まであった、あのリスクマネジメントかなんか事例を解説して、その裏にあることってなってくると説明しにくい…

司会：はい、ありがとうございました。今課題としていくつか出てきて、ちょっとトピックにはしようと思ってたんですけど、日本語の問題っていうところでですね、私実は日本語の教員として、いろいろあれなんですけれども、実際のところ、じゃあ今その良い悪いは別として、このレベルで実際に戦力としてやってもらわなければいけないというところがある中で、実際現場でどのぐらい、このぐらいだったらいいよねとか、あとほんとここで困っているとか、そういうことってもし何かありましたら、水口さんいかがでしょうか。

水口：そうですね、今私が勤めている施設の方には、海外の国籍の方が、ネパールの方が3名、フィリピンの方が1名、中国の方が1名というような形で働かれていますけど、入国が結構進んでいる方は、比較的日本語で困っているというはなくてですね、そこまで。ただ、最近来られた方に関しては、やっぱり読み書きの部分で、ひらがなは読めるんだけど、漢字はやっぱり読めない。だからこう、記録や、お食事をお配りするにあたっての名札みたいなものがあるんですけど、そこのところで、今になったからもうこれで読めるんだけど、来られた時はやっぱりふりがなが振ってないと読めないっていうのが多くありましたね。2人が今、実際に困っているのは、ニュアンスや、読み取りとといいますか、先ほど、馬込先生、おっしゃったように、なんかその、パッとこう割り切るといえるか、その部分で、自分の軸で本当に話される方が結構多いので、まあ、相手の立場に立ってのこう聞き取りとか、まあ、ここの表現とかがやっぱり難しいなどは感じます。

司会：はい、ありがとうございます。えっと、そちらで受け入れているプロセスとしては、もう本国から直接？

水口：今は来ていますね。

伊藤：今スカウトにも行っているんですよね、結構。

水口：そうですね。うん、

司会：そうすると、現地でどれだけ日本語教育を受けてきたかっていうのは、かなりばらつきがありますか？

水口：はい。

司会：ああ、なるほど。はい、ありがとうございます。占部さん、いかがでしょうか。なんかこう、日本語の課題？

占部：うちの施設でも、ベトナムの方がすごく多いんですけど、どちらかという  
とベトナムの方のほうが日本語とか、住んでる年数とかももちろん違うとは思  
うんですけど、すごく上手に話して、こちらの職場としても安心して結構  
任せられるというところもあるんですけど、最近一年ほど前のフィリピン  
の方々ですと、まだちょっと日本語が全然できない。うまく話せてないところ  
とかもあるので、まあその申し送りっていうところ、やっぱり引き継ぎとか  
もしっかりこちらもありますので、まあ慎重にそこはやりながら、はい、進  
めております。

司会：申し送りとか引き継ぎのところが少し変わるかなっていうところですか。

占部：介助の、ご利用者様との実際に声かけが少しつまづくとかそういったところ  
がやっぱりうまくできるまでは、っていうところは、ある程度、はい…。

司会：そちらの施設ではあれですか、養成校から？それとも本国から来ている？

占部。はい。本当に少し前からですかね。どちらかという、学校を挟んでから  
の方が…。

司会：専門学校などを卒業して？

占部：ベトナムの方は、はい。

司会：そういう違いって感じますか、日本語レベルの。本国から直接来た人と養  
成校で何年間か日本にいた方とで、やっぱりちょっと違う？

占部：はい。

司会：ありがとうございます。牧さん、いかがでしょうか。

牧：多くの場合、漏れずに申し送りが、文章を書いた紙をもとに、口頭で細かいところをチェックし合って申し送っていくんですけども、やっぱりそこに書かれてある情報を読み解くっていうところは、なかなか難しいところはあるのかなと思います。例えばある施設に新人の日本人の職員が来ました。もしこれを見て何かわかるかというところ、どうだろうというところはさすがにあるんですけども、そういったところは相手も苦慮されているのかなというところと、あとはそうですね、難しい漢字、この漢字が意味するものと、この漢字が組み合わさった時に意味するものがまた異なった時に、「これはなんでこの文字を使ってるんですか」みたいな質問がわかるとか、これはこの意味を打ち消す意味なんだよ、みたいな話をするなど、そういう学ぶ意欲はあるんですけども。実際、そうですね、業務の中でそれを聞くタイミングっていうのは、彼らはすごい迷っているような、印象は受けます。なので、そういったアンバランスとしてはちょっとこう日本語の勉強というか、その進み具合は実際お話できるし、っていうところは多いとは思んですけど高年齢という分野で使っている文言だったり、語句だったり、介護の専門的な用語だったりというところはまだまだ壁があるような感じがします。

司会：今のお話を聞くと、どちらかという書き言葉の課題の方が大きい。

牧：そうですね。

司会：口頭でのコミュニケーションは？

牧：私に関わった中では、口頭でのコミュニケーションは、ある程度はして下さる、できる方だったので。

司会：はい、ありがとうございます。奥田さん、いかがでしょうか。

奥田：そうですね、ベトナムの方2名と、中国の女性の方が1名とミャンマーの方4名いらっしゃるんですけど、ベトナムの方はもう3年以上とかで結構ベテランではあるので、フルで早出、遅出、夜勤やっている状態で、ミャンマーはまだ学校通いながらなので、遅出の業務がメインで入ってもらっているんですけど、中国の方も元々同一建物のデイサービスの方で、現場の方に異動されたんですけど、最近夜勤を独り立ちされて緊急、看取りの方でだんだ

ん痰が詰まり、もうサーチが下がってきて、緊急の対応にスタッフがかなり手間取って焦ってしまって、最終的に看取りの方だったので、問題はなかったんですけど、職員が涙していて、もっと何かできたんじゃないかなっていう、そういう僕らも緊急時の対応についての、もうちょっと詳しいことだったりとか、事前に伝えることができればよかったなというのはすごい反省しています。

司会：うん、そこはうまく、その言葉での意思伝達がなかなかできにくいってところ。そうするとそれは割と書き言葉というよりは口頭でのコミュニケーションでのことですかね。どちらもやっぱり課題があるということですかね。はい、ありがとうございます。まあ今のお話聞くと、私は日本語教師なので日本語教育への課題がたくさんあるかなと思うんですけども、日々やっていく中で、そういう専門職を養成している中でですね、専門領域のそれぞれの教育をしているかと思うんですけども、そことその日本語とのこう、バランスの取り方とかで、何かまあ困っていることとか、まあこうしたらいんじゃないかなとか、なんか感じていることって、もしありましたら、馬込さん、いかがでしょうか。

馬込：私、はい。例えば専門用語とかについて学校で教わる前に多くの留学生がアルバイトを施設でしておりましてね、施設の種類いろいろなんです。特養もあれば有料もありますので、いろいろですけど、だいたいわかりますね。専門用語が一年生の4月の段階ではさすがに無理なんですけど2年生になるともう、説明しても、聞いた聞いたとか、知ってる知ってるとかっていうことが多いのであれ？っていう感じになっちゃう、かえって。それは特殊ですよ、アルバイトしているからってということなのでアルバイトしなかったらわからない。むしろそのことをわかっているその専門用語云々よりも違うニュアンスのこととかになってきた時に説明が難しい。だから拙い英語で単語を引っ張り出してきて、説明しないといけないってことはありますよね。こういう雰囲気やねんとかって言っても分からないので、アトモスフィアとかって言って直してあげないと、みんな英語はできるので。だからそこを直すっていう作業が大変だなと思いますね。むしろニュアンスの方が大変。

司会：はい、ありがとうございます。伊藤さん、いかがですか。

伊藤：私の科目が介護過程の展開とか、本当に利用者の立場に立って、その人のことを考えるみたいな授業をするので、言葉をどれだけ伝えても、やっぱり自分たちの感覚でやるので、「麻痺があるんだったら、歩かせたら歩けるようになるでしょう」とか、無理にでもやらせたら、頑張ったらできるとか、そういう感覚で、1年生なんか特にそう思っている学生も多いのですが、ニュアンスがわかららないから、様子観察とかしばらく様子を見ましようが、それがどういうことをするのかかわからないとか、「もうちょっと後で」がどれぐらい後かがわからないとか、日本語も曖昧な言葉じゃなくて、細かくわかるように伝えないと、留学生は本当に腹に落ちて理解ができるというのは難しいんだなというのは、日々授業をしていても感じます。

司会：はい、ありがとうございます。傘さん、いかがですか

傘：はい。今のニュアンスが難しいのは、もうそのまま、同じように感じています。私は生物学と介護の基本VIなんですけど、確かに専門用語は言えればわかる。それが難しいのではなくて、例えば、介護の現場で今まであった、あのリスクマネジメントかなんか事例を解説して、その裏にあることってなってくると説明しにくいものだったかという感じなので。ただ、留学生の方が日本人より年齢層が高いんです。現実的に。そのせいもあって、比較的、日本人だからわかるかって言われると、その辺もまだまだ難しいかなと思っております。

司会：はい、ありがとうございます。ニュアンスってなんなんだっていうと、なかなか難しいところになってくるので、そうですね、日本語教育の立場としていろいろ考えていかなければならないと思いました。そうしましたら、現場で外国人も受け入れて、日々いろいろなさっていると思うんですけども、現場の方から見て、例えば養成校にこういうことをやってくれるともっといいのになあとか、そういうのとかって何か。ありますか。突然聞いてもなかなか難しいかな。まあ日本語の面でもですし、あとまあ実際専門のこととかでもなんですけど、どうでしょう急に、聞かれてもっていうところあるかな...

伊藤：例えば実習生で受け入れるのにここは最低でも、とかありますか。

水口：先日、実習をね、二人を受け入れさせていただいたんですけど、本当に日本語能力が留学生という形で来られている方って高いなと思うんですけど、最初に感じたことなんですけど、先ほども質問がありましたけど、直接来られた方と留学生でどっちが日本語能力で差異ありますかってめちゃくちゃあると思っていて、ベトナムで、入国されて、今現役でバリバリ働いてくださっている方って、留学で一番最初に入職されて働いたのは28時間の縛りがある皆さんだったので、きっちり学校で学ばれて、その中で職場で実践して、その時ってまだ海外で入られている方も少なかったから、先ほど傘さんがおっしゃられたように、母国語でしゃべれるっていう土壌もまだなかったので、職員としゃべらざるを得ないというところがありまして。なので、そういった留学でこられている方は、いろんな文化圏の方がいらっしゃると思うんですけど、ここで話されることであったり、実際に働きに来た時に話されることであったりとか、中でも直で来られるよりは、日本語がやっぱり上達されているな、というのを一番感じるの、何かこう、養成校の先生方に何かお願いするという、そこの日本語を今と同様に、引き上げていただければ、来られた時の学びがより深くなっていくでしょうし、我々もその日本語に、海外の方に対する伝え方の「優しい日本語」というテキスト本をうちの理事長の方から読みなさいよという、我々も言われて、拝見させていただいたりしてはるんですけど、そういったところはこう、我々もすべきことがあるとは思いますが、養成校の先生方にお願いするとしたら、そこの日本語の部分、より本人たちが磨ければ、もっといい学びができるんじゃないかなと思います。

司会：はい、ありがとうございます。占部さん、いかがでしょうか。

占部：おっしゃったこと、本当に。僕自身、実習の担当だったんですけども、まあ、本当に1回、前回受け入れた時は、一人が日本の方で、お一人が海外の方だったんですけど、その海外の方はものすごくアルバイトとかもしていたので、すごく日本語とか、その介護技術ってところが優れていたの、特にそのあまり課題というところが見当たらなかったの、次また1月、2月と受け入れさせていただいたんですけど、まあ自身も課題を見つけて自身の改善もできているのかなと思っています。

司会：はい、ありがとうございます。牧さん、いかがでしょうか。

牧：そうですね、実際に実習生を受けてっていうところ、で、日本語に関しては全く問題ないというか、コミュニケーションも取れるし、しっかりとその、じゃあ今日はどうしますかっていうふうな質問をしたときに、じゃあこうしたいと思いますという考えも述べられてますし、しっかりと何でしょう、お考えを持って実習に臨まれているというところはすごく感じた部分ではあるんですが、国柄なのか、その方自身の気質によるものなのかというのはわからないんですが、我々も接遇面で気をつけている部分っていうのがあるんですけれども。うん、なんでしょう。ええ、リラックスしたという言い方でいいのかわからないんですが、まあ、こうお話しされている時に…。まあ、僕らであったらこう、目線を合わせるとか、大声よりはしっかり距離を近づけて話したりとか、目を見て話すっていうところ、意識するような部分ではあるんですけれども、なんでしょうね、こう相手にその方が入ってきやすいのかはわからないんですが、横並びでちょっと足を組みながら、こう喋られたりとか、あとはそうですね、申し送りを聞く場面だったりとか、実習の指導役になっている人のお話を聞く際に、一部ではあるんですけど、壁にもたれて聞かれているっていうところがあって、実際ちょっと現場の職員から、あれってどうなの？という意見は上がったりはしたので、その人がする態度が持つ意味みたいなのが、もう少し伝わればいいかなっていうのは感じました。

司会：はい、ありがとうございます。そこら辺はもう言葉、非言語の部分っていうのもすごく大きいかと思えます。そうですね、一つそういう点っていうのも、まあ課題としていますね。はい、ありがとうございます。奥田さん、いかがですか。

奥田：実習の方を受け入れたことはないのですが、なんかあんまり想像はあまりできないんですけど、やっぱり日本人でいう礼儀とか、そういうのって結構大事だとは思いますが、僕も最近ミャンマーのことを話してて、ミャンマーの方はこうやってることが礼儀正しいらしいっていうのを聞いて、日本と全然違うやんだっていうのを改めて、知った…。そういうのをやっぱりお互い知らないといけないというのはあります。

司会：そういう点はもしかしたら今後必要になってくるかもしれませんね。頭を撫でるのが侮辱的な国もありますから、いろいろわかっているといいかなと思います。はい、ありがとうございます。ちょっと時間が押してきたので、そうしましたら、まあ、これ、漠然とした質問になってしまって、なかなか答えにくいかなと思うんですけども。まあ、今この2025年から見える未来

っていうのを、ちょっと皆さんに少し考えてもらえたらなと思ってですね。まあ、10年後とかですね。日本の高齢化はどうなっているのかっていうのはほぼ予測がつくかと思うんですけど、その中で日本の社会っていうのがどういう風になってきて外国人介護職員がどういうふうに位置づけられていくのかっていうところ。ちょっと、本当予想で夢物語でも構わないんですけども、一言ずついただければ…。多分考えていらっしゃると思うので、最初に馬込さんから。

## 2025年から見ると未来

馬込：多分、人口は日本の人口が減っていく、だけど社会を保たないといけなくて話になったら、どう考えても外国の方にお手伝いしていただかないと、外国の方も仲間にしないと話にならないわけだから。今より順応していくんでしょうけれども、もっとニーズが増えてね。外国ってということについての意識が高まることだと思うんですけど、一方でその反動もあるんだろうなっていうふうに思っていて、今でもナショナリズムが少し台頭してきているところがあるので、やっぱり日本古来のとか、日本伝統のという声がだんだん大きくなってきてるっていうのはグローバリズムとナショナリズムは拮抗しますから。そういうところはこれからも出てくるんだろうなっていう…。どっかの国は出ていけみたいなのを今でも声高に叫んでいる人もいますから。そういうのはこれからも出てくるでしょうから。ただ、いないとどうしようもないよっていうことへの理解はすごく進むだろうなっていうふうに思いますよね。僕今のところそのぐらいしかちょっとイメージできないんですけど。

司会：ありがとうございます。伊藤さんいかがでしょうか。

伊藤：今、現場で入所者の方が外国人のケアスタッフが嫌やわっていることは一切ないですか。

奥田：いえ、ございます。

伊藤：やっぱりある。それってやっぱりここ最近ですもんね。御法人の施設は生野区で在日の方が多から職員で在日の韓国人の方もいらっしゃる。そこは別にね、利用者さんも韓国人の方もいらっしゃるから意識はないけれど。いろんな国の方が今後増えてきたら、やっぱりそれを拒否されるという方は多く、いらっしゃるんでしょうね。

奥田：そうですね、私が勤めているところが、まだ慶生会の中でも少しグレードの高い施設になっていると...、東成区という土地にあるので、やはりちょっともう海外の人はよこさんといってくれていう...

伊藤：そういうまだ意識はあるんですね。10年後ってどうなんだろうとか、もう当たり前になっていって、受け入れられてるのかしら、もっと。それがありがたい、良かったよね、いい人で良かったね、なのか、仕方ないよねってなったら残念だなとも思うんだけど、どうなってるのかなっていうのは、今すごくお話を聞いてて感じました。

司会：はい、ありがとうございます。傘さんいかがでしょうか。

傘：あんまり考えたことなかったんですけど、学校でも今、一年生は10カ国の方がいらっしゃるので、今の日本の政府の方針とかあるんでしょうけれども、私の理想としては学校も社会も、できるだけこの今の、本学の一年生ぐらいの国の方が、いろんな方が受け入れてもらえるように、私たちの現場の方たちのそういう社会になるといいなどは思っております。

司会：ありがとうございます。じゃあ、水口さん。

水口：私も今の労働人口を考えていくと、間違いなく介護に担っていただける日本の方というのは少なくなってくるので、海外の方に頼らざるを得ないというところは間違いなくあるだろうなどは感じています。今現状も、海外の方を受け入れられている入居者様もいらっしゃれば、ちょっと敬遠されている方もいたり、家族様でもそういった方もいらっしゃるんですけど。今、街中でも、コンビニの店員さんとかでも、海外の方がバリバリ働いていたり、いろんなところで働かれています。うちの施設は今、ネパールの方がユニットリーダーっていう、みんなを取りまとめる1歩目のリーダー職があるんですけど、候補になっていただいている、いろいろと本人さんは不安であったりとか、自分自身でやらないといけない責任感が強くて、ちょっと周りとうまく回っていない現状は実際あるんですけど、そういったところを今担ってもらってたりしています。なので、10年後はそういうふうに中核になれる海外の方も増えるんじゃないかなとは期待はしてるんです。また実際介護で働く上でさっきの言語的なものであったりとか、書くっていう、ヒアリングだけじ

やなくて、ライティングもあるっていうところなんですけど、その部分も、なんかこう翻訳機能とかがもっと発達して、比較的その入ったばかりの人でもある程度記録できるようなものになっていくんじゃないかなとか、それをこう翻訳してくれる、いいぐらいのニュアンスで翻訳してくれるアプリとかも開発されるんじゃないかなとかっていうのは、ちょっと考えたり期待したりするところですね。

司会：ありがとうございます。じゃ占部さん。

占部：まあそうですね。本当に今後、10年は海外の方が増えていくところで、現状こちらとしましても、見てて感じるのが、すごくそのご利用者様と海外職員も壁っていうのをすごく感じているところでありまして、中にはもちろん相談しやすい方もいらっしゃると思うんですけども、どちらかというところと、やっぱりご利用者さんも日本の方にもものすごく相談しているなっていう印象がすごくありまして、そこはやはり日本語の壁だとか、あとは海外の人たちは物の言い方がきつめといいますか、そういったところも見ててやっぱり思いますので、今後、その同じ指導に当たるところがもっとうまく、介護のコミュニケーションの取り方とか、そういったところをお見せして、おっしゃったようにリーダーになれるようなところまで築き上げていければなとは思っております。

司会：ありがとうございます。牧さん、いかがですか。

牧：ええ。私はここに勤めて10年になるんですけど、これから先の10年っていうところでは、やっぱり今もIT化、介護のIT化とかいろいろ進んでいく中で、やっぱり10年っていう単位で経っていくと、もっと進んでくる実態はあるんであろうっていうところは考えますし、今現在、総理大臣も初めて女性になってっていうと、そうですね、制度だったり、給料体系の見直しだったりっていうところが進んでくれば、現時点では海外人材に頼らざるを得ない未来しか見えないんですけども、もう少し日本人が振り向いてくれるような現場になっていく未来もあり得るのではないかっていうのは考えております。ただそうですね、やっぱりもうこれから10年、今まで勤めてた施設で、だいたい4年、5年ぐらい勤められてた方が、結構職員の中でもちょっと中核的な役割を担いつつある実際があったので、またさらに10年って経ちますと、やっぱりそのユニットリーダー、サブチーフとか、そういうもっともっと上の地位についている海外の人材がいるっていう未来もやっぱりあ

るんであろうか。まあ、いろんなちょっと選択肢があるのではないかと思います。

司会：はい、ありがとうございます。じゃあ奥田さん、いかがでしょうか。

奥田：そうですね。外国人の方の労働人口も現場が増えて、今も土日は結構、日本人のスタッフが休むことが多くて。今日はもう外国人スタッフが多いな・・・みたいな感じで、パワーバランスがちょっと弱い時に、家族さんがたくさん来られて、日々の状況を伝えれないとか、そういうのが今マイナスというか、課題もあります。いずれそういう中間部的なリーダーになって、それを家族さんにも受け入れてもらい、説明ができるようなスタッフが増えていけば、もっともっと働きやすい環境になるのかなと思います。

司会：はい、ありがとうございます。今の話はちょっと10年後への記録として、ぜひ聞いておきたいなと思った内容でした。ちょっと時間がもう押してきてるんですけど、AIがこれだけ、もう1年後すらAIがどうなるかわからないような状況で、そこらへんとかも相当入ってきて、言葉の問題とか、もしかしたらそこで解決できるようになるのかなとか、あとはもうAIを積んだロボットが出てきてっていうところも展開とかも、もう10年後っていうのは十分あり得ると思っているので、今回のこの話ですね、すごく貴重な記録になると思います。ちょっと時間が押してもっともっと話したかったんですけど、多分あの教員の方ももっともっと話したいこといっぱいあったかと思うんですけども、また別の機会に、ぜひ。本当に貴重なお時間ありがとうございました。

## 原著論文

### 食事介助動画を使用した介護職員による注視点計測研究

A study on measuring gaze points by caregivers using meal assistance videos

伊藤美加子<sup>1)</sup> 後藤彰彦<sup>2)</sup> 藤田杏純実<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 東大阪大学短期大学部介護福祉学科

<sup>2)</sup> 大阪産業大学デザイン工学部情報システム学科

Mikako ITO<sup>1)</sup> Akihiko GOTO<sup>2)</sup> Asumi FUJITA<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> Department of Social Care, Higashiosaka Junior College

<sup>2)</sup> Department of Information Systems Engineering Faculty of  
Design Technology Osaka Sangyo University

#### 抄録

高齢者介護の現場における介護技術の指導方法や内容は熟練介護福祉職による個別指導により行われることが多く、その指導は熟練介護福祉職による「経験値」や「暗黙知」による場合が多く散見される。介護技術の中でも、特に明確な支援技術の指導内容として確立していないのが、介助を行う時の「視線」についてである。熟練介護福祉職が介助中にどこに視線を送っているのか、意識しているのかなど、この部分はかなり熟達した指導者であっても、明確な意図を持った視線の動きを説明することは難しい。本研究では食事の介助動画への注視点実験で嚙下が認識できて0.2秒時に見ている箇所注目し、各被験者の介護経験年数より食事故体験者が多く口元に注視を向けていること、ひやりハット体験がある被験者では注視点箇所にばらつきがある結果が得られた。これまでの研究の結果、事故の体験が介護経験年数に関わらず、食事介助中は「口」もとへの意識が向いている結果が得られた。

key words: 介護技術指導 食事介助 注視点計測 介護技術のコツ

#### I. 背景と目的

2025年9月14日総務省統計局の発表<sup>1)</sup>によると、同日時点で日本国内の65歳以上人口は前年比5万人減の3619万人であるものの、総人口に占める割合は29.4%と過去最高を更新し、世界38各国中で最も65歳以上人口の多い国であると発表された。国立社会保障・人口問題研究所による推計<sup>2)</sup>では、今後もこの割合が上昇を

続け、2040年には34.8%、2045年には36.3%と予測されている。また厚生労働省発表の2025年4月暫定版の介護保険事業報告の概要<sup>3)</sup>によると、4月末時点の第1号被保険者数は3,585万人、同月の要介護（要支援）認定者数は723.0万人となっている。また施設サービス受給者数は95.9万人で、うち「介護老人福祉施設」が57.4万人、「介護老人保健施設」が33.8

受付日 2025年12月1日/受理日 2026年2月19日〔連絡先〕(勤) 〒577-8567 東大阪市西堤学園町3-1-1

万人、「介護療養型医療施設」が0.3万人、「介護医療院」が5.0万人と報告されている。これら介護福祉施設を含め、介護福祉職員の必要数について、2021年7月9日付けの『第8期介護保険事業計画に基づく介護職員の必要数について』<sup>4)</sup>にて2019年度の介護福祉職員211万人を起点に2025年度には約243万人(+5.3万人/年)、2040年度には約280万人(+3.3万人/年)の増加が必要と試算されている。しかし、同発表の都道府県別の集計では<sup>5)</sup>東京都では2025年度には3万人強、大阪府では2万人以上の不足が推計されており、この数値は年度を追うごとにさらに増えていくことが予想されている。人員不足が長く続く介護福祉業界の中でも、特に高齢者介護福祉施設での就労は24時間365日の生活支援から看取りまでを実践する必要があり、心身ともに過重労働とのイメージや看護師と比べて社会的地位の不明瞭な部分から日本の若年世代の「介護や福祉」への興味関心度は決して高いとは言えない。

そのような現状でも意欲をもって介護福祉業界に就職してくる人にとって、最も苦勞するのが介護技術の習得である。排泄介助や車いすからベッドへの移動などの移乗介助などは介護福祉職員の身体の使い方や手技が必要となる。たとえ介護の専門学科を修了していても職場ごとの環境や設備、対象とする要介護者の状況など、その場に応用した「個別で専門的な技術」が細かく指導される機会は多い。

しかしどの介助技術指導においても「見る」という介護技術についてはあまり明確な指導がなされていないと考える。これまでの高齢者介護福祉施設での筆者の経験上、食事介助中に発生する「誤嚥事故」は決して介護福祉職員が見ていないところで発生するだけではなく、介助を行っている介護福祉職員の目でも発生することがあり、「見ていなかった」や「気がつかなかった」という言葉が発せられることに疑問を

感じてきた。これは介護福祉職員の食事介助という介護技術に対する「見るべきポイント」の介護技術の低さが根底にあると考える。高齢者介護福祉施設での食事介助は決してマンツーマンで行う介助だけではなく、時には複数の方への介助や同じテーブルで食事を食べる他の方の様子もしっかり「見ておく」必要がある。

福田ら<sup>6)</sup>の報告ではアイカメラを使用した「視線」の計測を行っているが、食事介助の場面では視線停留範囲を「顔(その一部)」「上半身」「体幹」「スプーン」など分類範囲が広く、また被験者の視野に入るさまざまな情報を含めた解析が主であり、介助を受ける対象者にのみ焦点を当てた細かな視線解析の報告ではない。

本研究では多くの介護福祉現場で経験値のうえに習得される「見る介護技術」に注目し、特に食事介助の場面で要介護者の目を見て表情を確認する。咀嚼や飲み込みの確認に口元やのどを見ることを意識することが食事介助技術指導の重要指導ポイントであると考え、介護の経験値が高いまたは、食事に関する事故体験がある介護福祉職員ほど、「見るべきポイントを押さえている」と仮定し、検証することを目的とし、多くの介護福祉の実践現場で経験値や暗黙知で見過ごされがちな「見る技術」に注目した検証を行なった研究である。

## II. 方法

### 1) 実験用動画作成

実験用動画として、大阪府内の高齢者介護福祉施設に入居される88歳の女性(2023年時)、左被殻出血後遺症で右上下肢麻痺、要介護度5の認定あり、普段の食事は全粥とミキサー食を全介助で摂取される方を対象とした(図1)。撮影時には本人及び身元引受人に書面にて研究内容及び動画使用時の説明を行い、同意を得たうえで行った。撮影は体調に問題のない夕食時に同施設の介護福祉職員よりテーブルに横並びで

食事介助を受ける様子を、直径 90 センチほどのテーブルをはさんだ真正面から固定したカメラを使用し行った。実験に使用した動画は約 45 秒間に 2 回、スプーンによる食事介助、咀嚼と嚥下をそれぞれ行う様子が見られた。



図 1. 要介護者と食事内容

0.016 秒ごとに視線が重層している場所をあらかじめ設定した 12 種類（頬・胸・目・額と耳・頭・口・鼻・肩・スプーン・のど・その他・フレーム外をエラー）に分けて確認を行った。



図 2. 実験の様子

## 2) 実験装置

被験者の注視点計測にはキャリブレーションフリー視線計測装置、EMR-ACTUS ((株) ナックイメージテクノロジー、本社：東京都) を用いて取得した。

## 3) 実験手順

この動画を用いた注視点計測の被験者は、別の高齢者介護福祉施設に勤務する 20 名の介護福祉職員で全員が介護経験年数 3 年以上であった。まず初めに全被験者に「介護技術指導の経験の有無や食事介助に関する事故等の経験について」のアンケートを実施した。その後先ほどの約 45 秒間の食事介助動画を視聴してもらうが、1 回目は初見の要介護者のため、情報収集を目的に座位で目線のみを動かして視聴してもらう。その後 60 秒間閉眼して休息をはさみ、2 回目は同じ動画を自身が動画内の方の食事介助時の見守りをしているつもりで目線のみを動かすよう説明を行って計測した。計測の実験は遮光した約 30 平方メートルの部屋の一角にて図 2 に示すように 23 インチディスプレイに座って対面した。分析対象は動画再生開始から終了時までとし、得られた注視点情報を動画上に重層させ、サンプリングレート 60Hz で 1 フレーム約

## 4) 被験者情報

実験に参加した被験者 20 名のうち、今回の研究で使用したもので、「食事介助時に事故体験有」と「食事介助時にひやり体験有」のそれぞれ 4 名計 8 名の情報を表 1. に示す。食事故体験に違いはあるが介護経験年数の近い被験者を選定しデータ解析を行った。

表 1. 経験別に分けた被験者情報

	被験者8名	経験年数
事故体験有	事故有①	18
	事故有②	9
	事故有③	8
	事故有④	5
ひやり体験有	ひやり①	18
	ひやり②	10
	ひやり③	9
	ひやり④	5

## 5) 倫理的配慮

本研究は東大阪大学短期大学部倫理審査委員会の承認を得た研究である（短 R4-07、短 R5-06）。

## 6) 解析方法

今回着目したのは、「事故体験有」のグループと「ひやり体験有」のグループで視聴する動画内の高齢者への食事介助時の「嚥下」が行われるときに視点がどこにあるかについてである。

人が何かを認識してそこへ注意を向けるまでの目の動き（サッカード）の反応時間に関しては、基礎的な文献<sup>7)</sup>から人が何かを見てから注意を向けるまでにかかるおおよその速さは0.1～0.2秒後と言われており、今回の実験の動画視聴の1回目、「情報収集を行うつもりで見る」時と2回目の「自身が食事介助を行っているつもりで見る」時の「嚥下」が起こった0.2秒時にどこに視点があるか、事故体験有とひやり体験有の経験年数が近い被験者計8名で検証を行った。

#### 結果

1回目の「情報収集を行うつもり」の視線データにおいて、動画内でスプーンに全粥が介助され高齢者が咀嚼を行ったのち、口を閉じて嚥下を行った時を動画の25秒目とし、そこから0.2秒経過時の25.2秒時の視点部位、また2回目の「自身が食事介助を行っているつもりで見る」時の同じ時間の嚥下25秒目から0.2秒経過時の25.2秒時の視点部位を一覧にまとめたものを表2. に示す。また同25秒から26秒時点までの視点の変化と今回着目した25.2秒時に印を付けた各被験者の視点の軌跡を図3. から図.10に1回目の結果、図.11から図.18に2回目の結果として示す。表2. で確認できるように、事故体験がある被験者は介護経験年数に関わらず、嚥下を認識した0.2秒後に口元に視点が動いているケースが1回目も2回目も多く確認され、口に近い鼻も含めると、嚥下をしたことへ注意を払う無意識の視点の動きが、事故体験有の被験者群により強い傾向が見られた。ひやり体験有の被験者では、1回目の視点で「鼻」が3名確認されたが、2回目の「介助をしているつも

りでの見守り」条件下では「頬」に2名が入り、1回目の結果ともばらつきが見られた。

表2. 1回目と2回目の25.2秒時の結果

	1回目の25.2秒時	2回目の25.2秒時
事故有①	口	頬
事故有②	口	口
事故有③	のど	口
事故有④	口	鼻
ひやり①	胸	のど
ひやり②	鼻	頬
ひやり③	鼻	頬
ひやり④	鼻	口

#### IV. 考察

これまでの検証の中<sup>8)</sup>でも、事故体験有の被験者は実験全体を通して「口」への視点が多く、明らかにひやり体験有の被験者と差が見られていたことから、事故体験者は食事介助の見守りには「口」へ視線を向けることが重要であると認識しているのではないかと考えられる。また今回の食事介助の「嚥下」というイベントに着目した結果からも事故体験やひやり体験での差が介護経験年数に関わらず明らかな差として確認できた。福田ら<sup>6)</sup>の研究報告では、食事準備から食事介助時間、喫茶準備など長い時間を眼球運動計測装置であるヘッドユニットを装着して全体の時間を通して介助中の注視していた場所、介助をしている際の注視箇所、他の利用者への視線など広い範囲を検証しており、比較しているのは「介護経験年数」のみで、食事介助時の結果として『経験の長い熟練者は相手の顔、とりわけ目や口元や喉元を見ている時間が長い傾向が見られた。』との内容であった。それに対し、本研究では経験年数と「介護事故」の体験の有無が「見守り」を行う際の意識に大きく影響するのではと考え、特に食事

の「嚥下」を認識した際に注視している箇所をより細分化して検証を行ったことで、新たな研究成果が得られているものとする。ただしサンプル数が8名と少数であるため、継続して残る被験者全員の食事が口中へ入ってから0.2秒経過時の注視部位と、2回目の口中への食事介助の際の0.2秒経過時も比較検証することで、今回の「事故体験有」の介護福祉職員ほど「ひやり体験有」また、「事故体験無」の被験者と比較して、食事介助、特に嚥下を認識した際には介護経験年数に関わらず、高齢者の口やその周囲に注視点が集中している説をより明確にしていけると考える。

今後の取り組みとして、各被験者へ各自の結果をフィードバックすることで、「情報収集」と「自身が介助をしている」という目的で見る箇所の認識の違いの差をより明らかにしていく必要がある。これらの結果をもとに、将来的には要介助者への介護実技用VRゴーグルによる実技シミュレーターで「介護事故」を体験できるような教材の共同開発・作成も検討したい。実用化できれば、介護技術習得の時間短縮、実体験型学習ができ、介護福祉士養成校での学生募集では「ITを活用した介護技術習得」「シミュレーターによる最新学習方法」としてアピールができ、学生募集につながることも期待できる。また介護技術不足が原因の悲しい介護事故や重篤事故を経験した介護福祉職員の離職率の軽減にも役立つのではないかと考える。

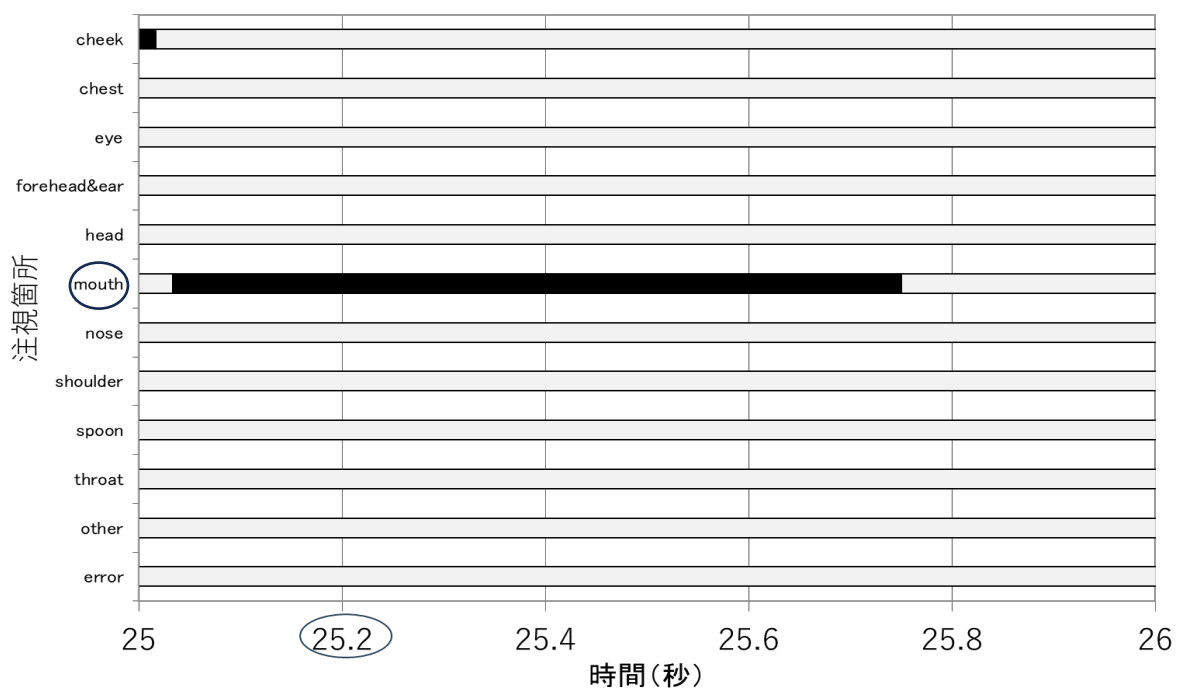


図. 3 事故有①の1回目の視点移動の様子

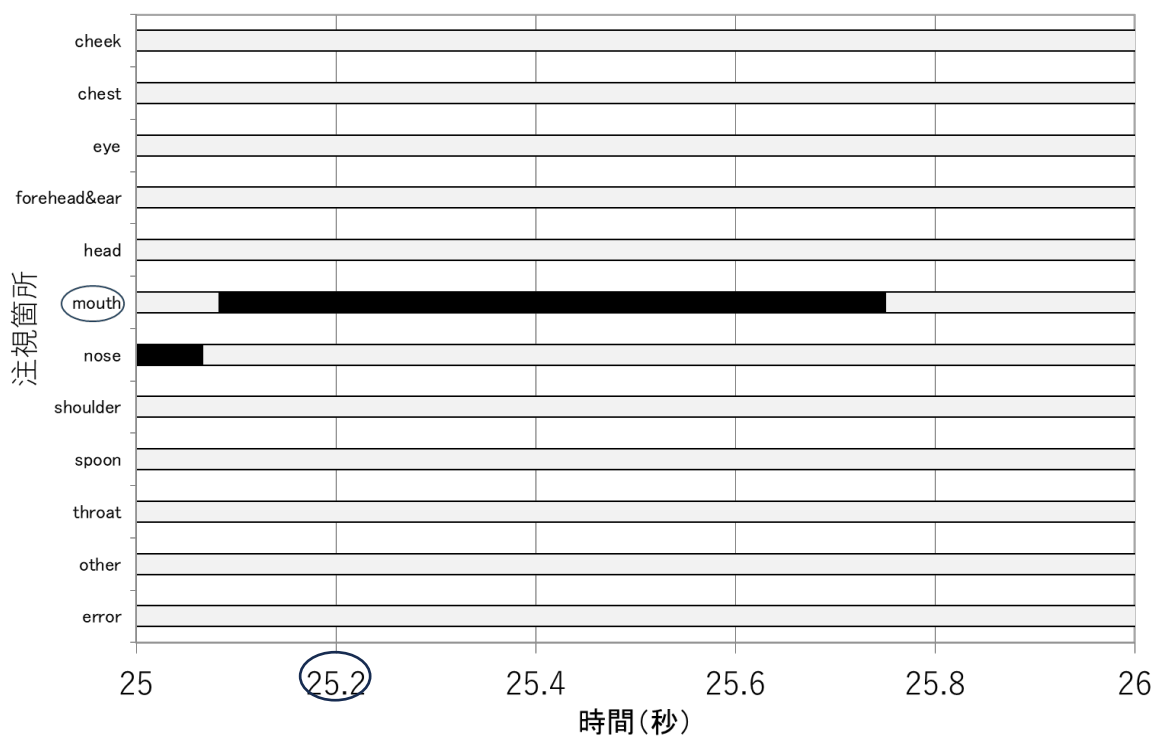


図. 4 事故有②の1回目の視点移動の様子

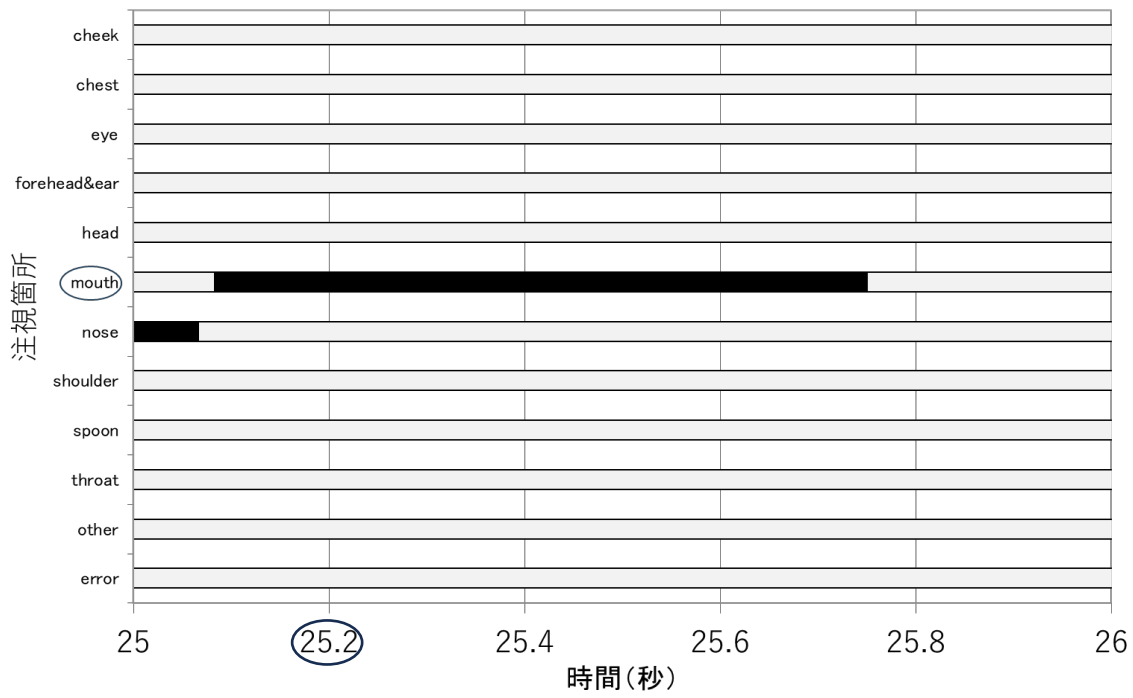


図. 5 事故有③の1回目の視点移動の様子

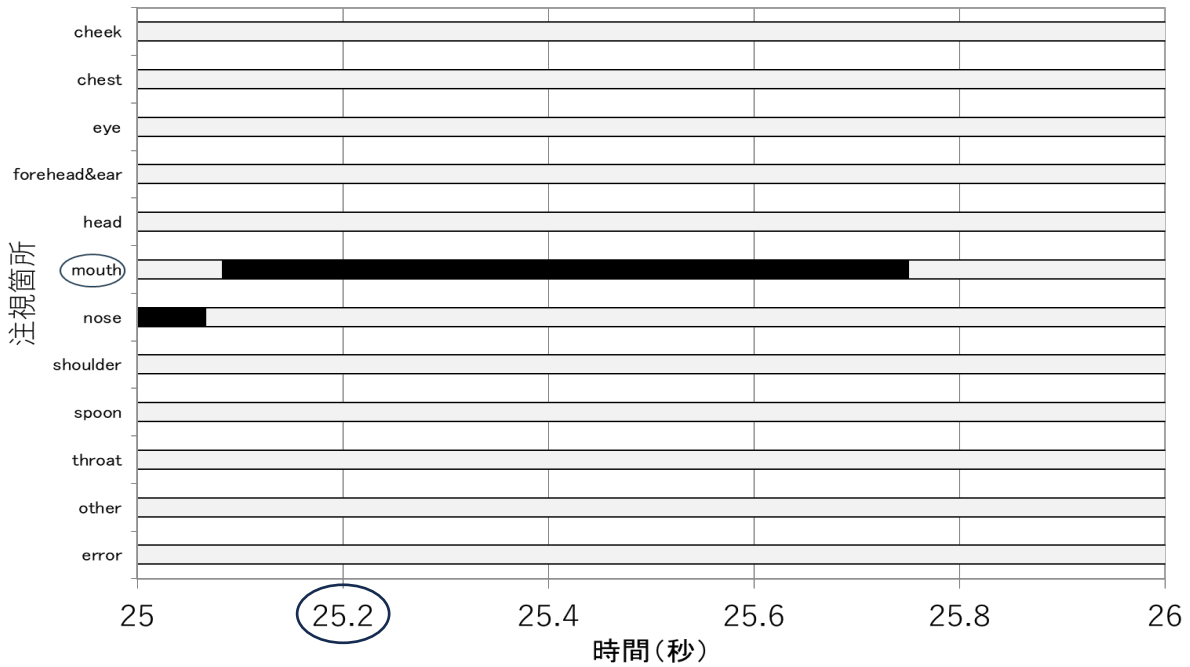


図. 6 事故有④の1回目の視点移動の様子

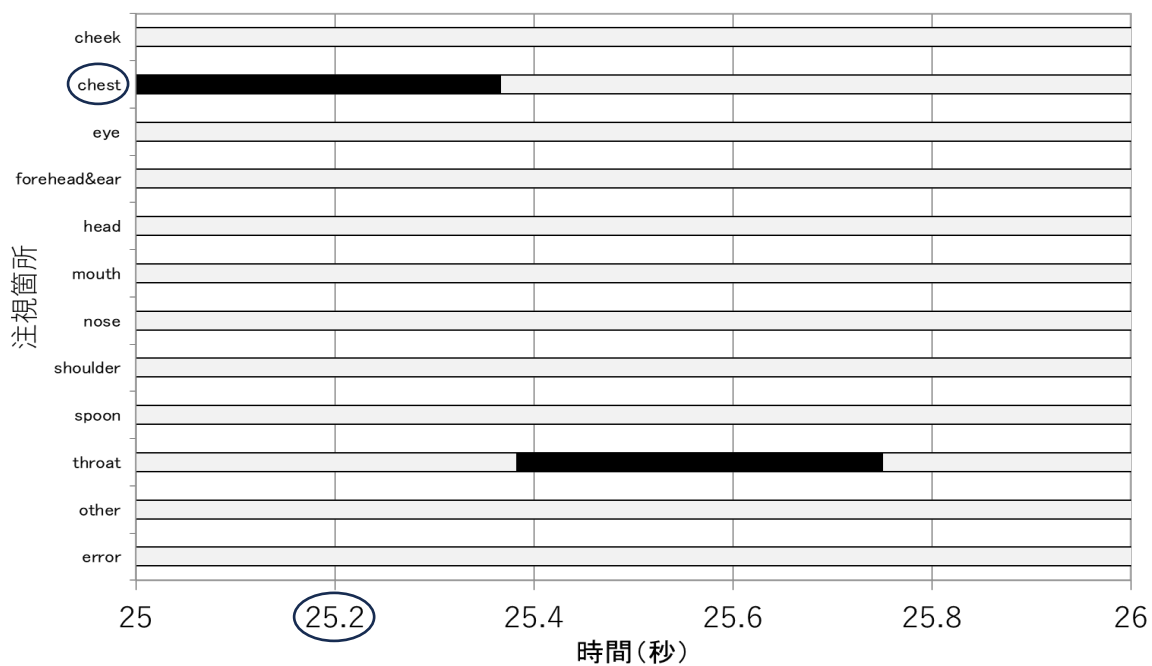


図. 7 ひやり①の1回目の視点移動の様子

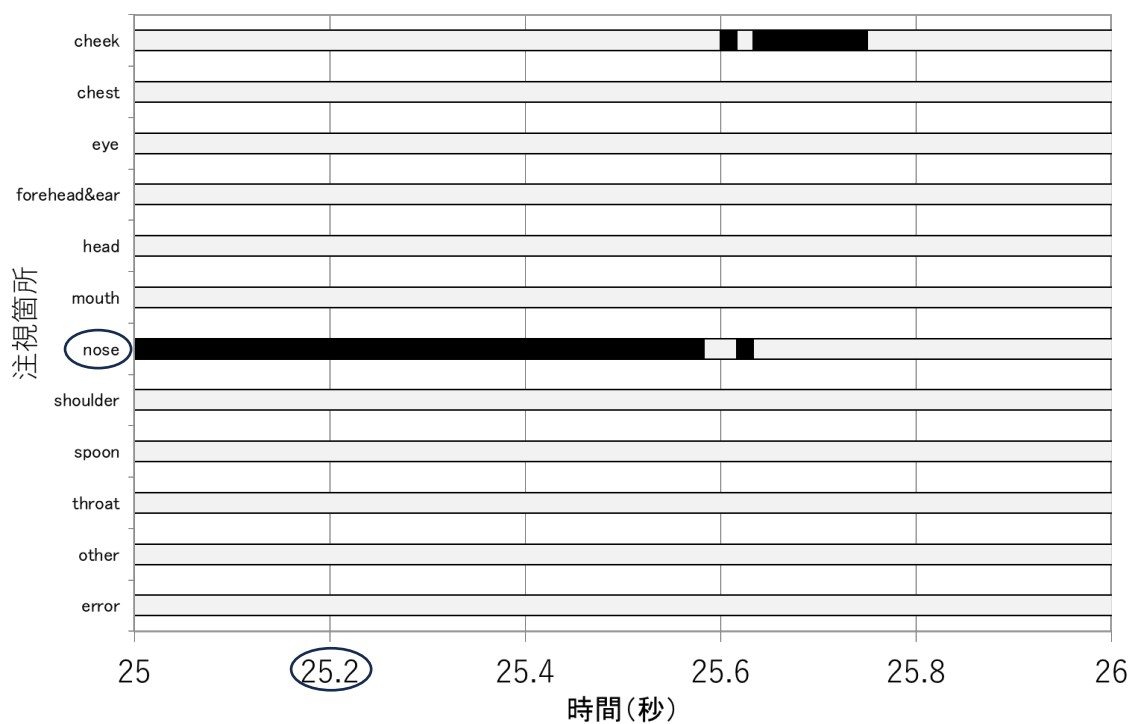


図. 8 ひやり②の1回目の視点移動の様子

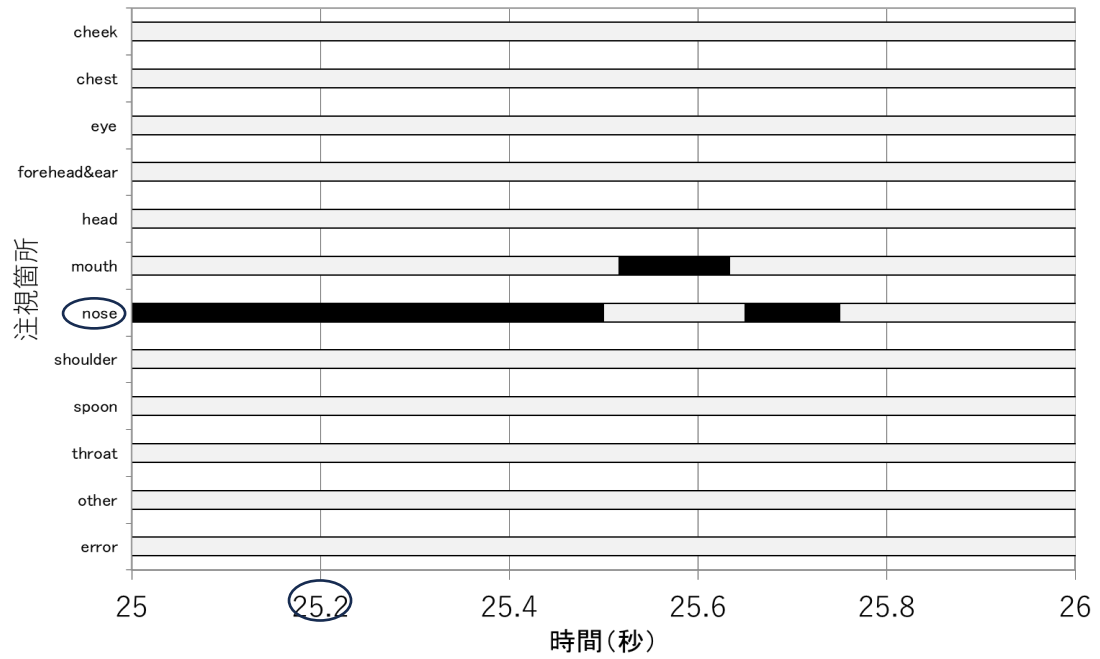


図.9 ひやり③の1回目の視点移動の様子

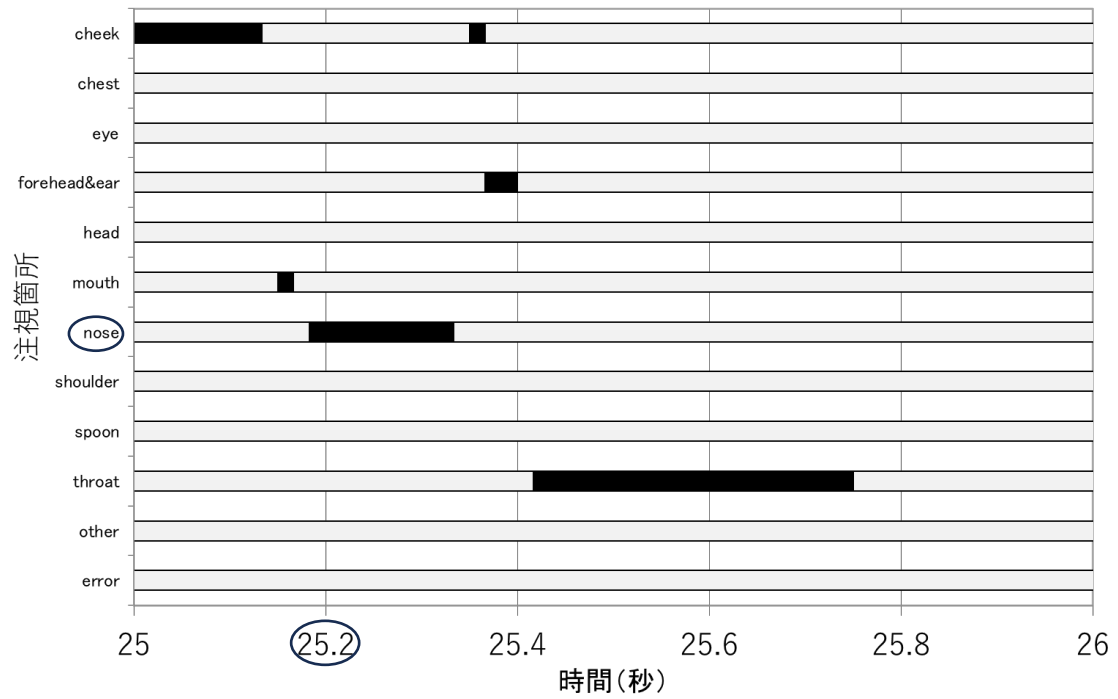


図. 10 ひやり④の1回目の視点移動の様子

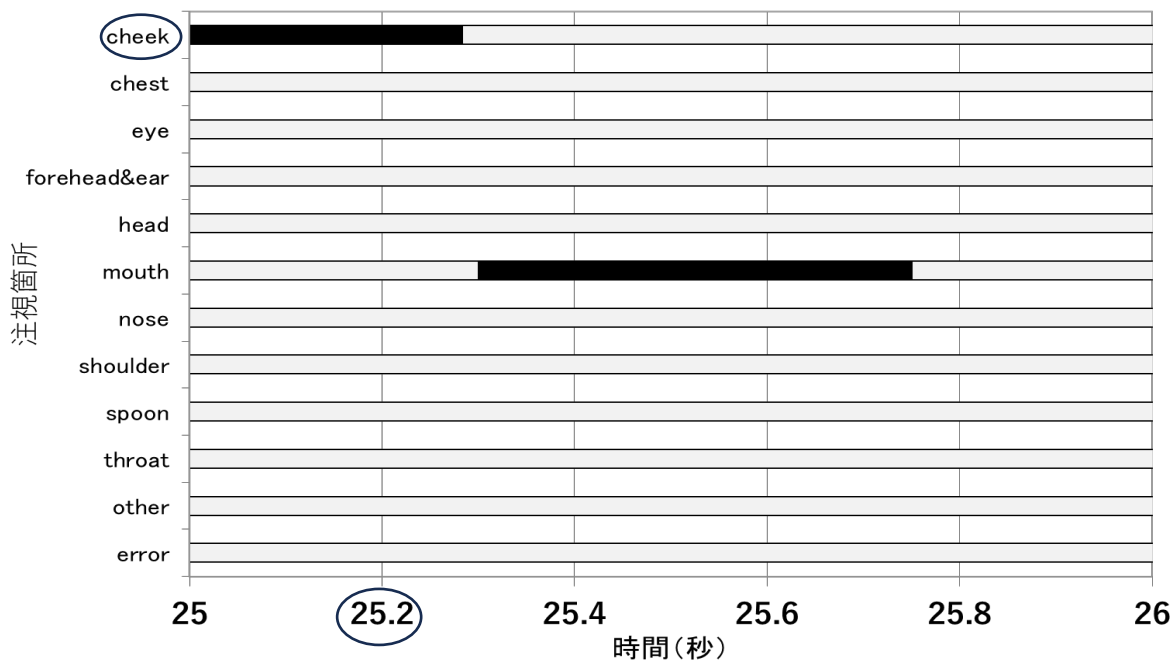


図. 11 事故有①の2回目の視点移動の様子

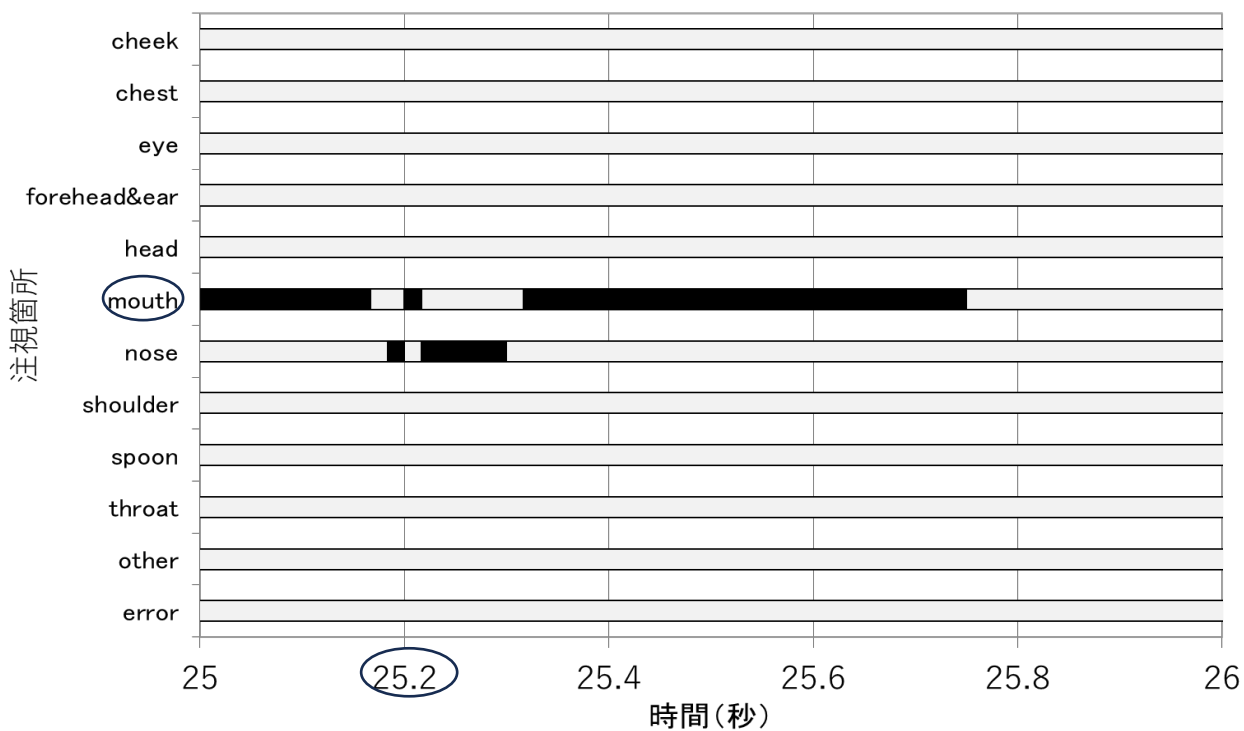


図. 12 事故有②の2回目の視点移動の様子

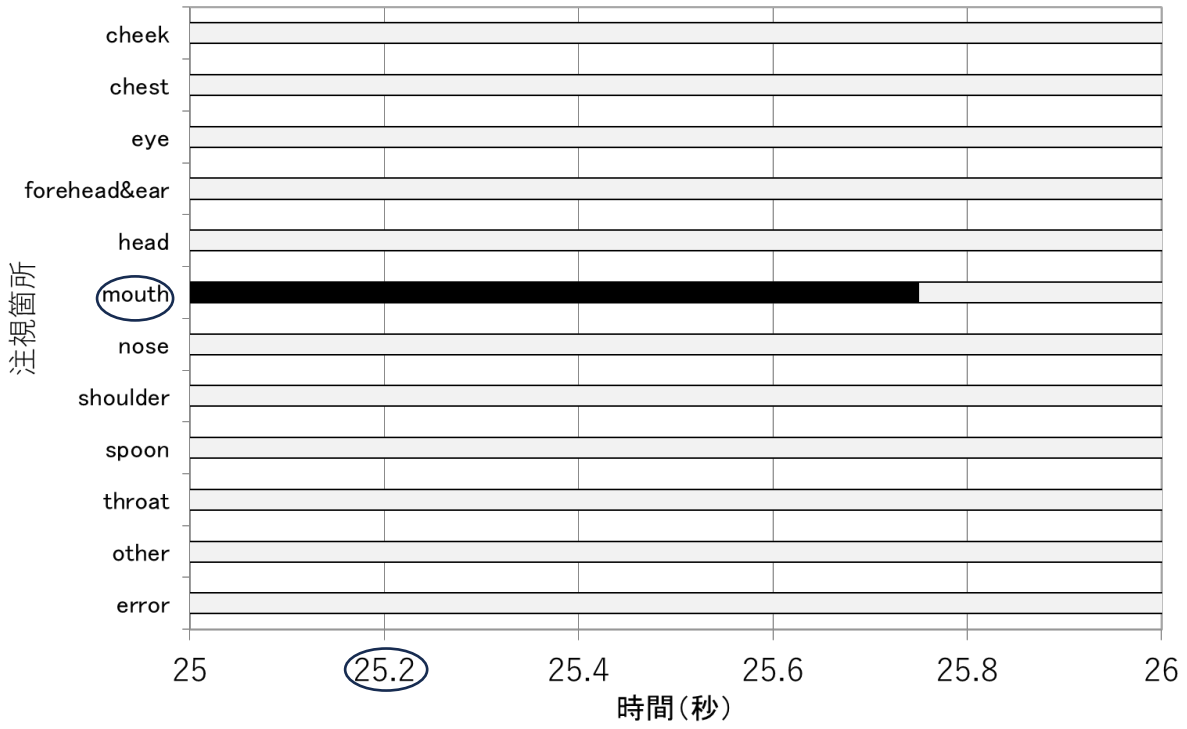


図. 13 事故有③の2回目の視点移動の様子

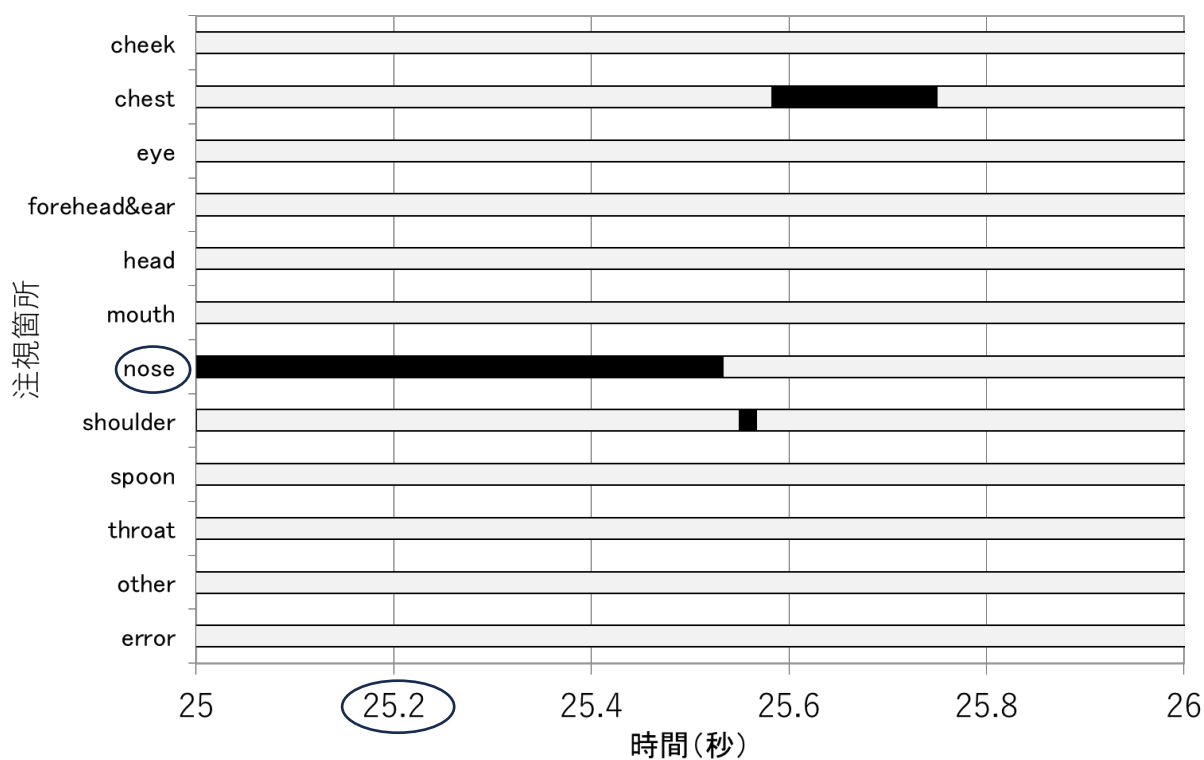


図. 14 事故有④の2回目の視点移動の様子

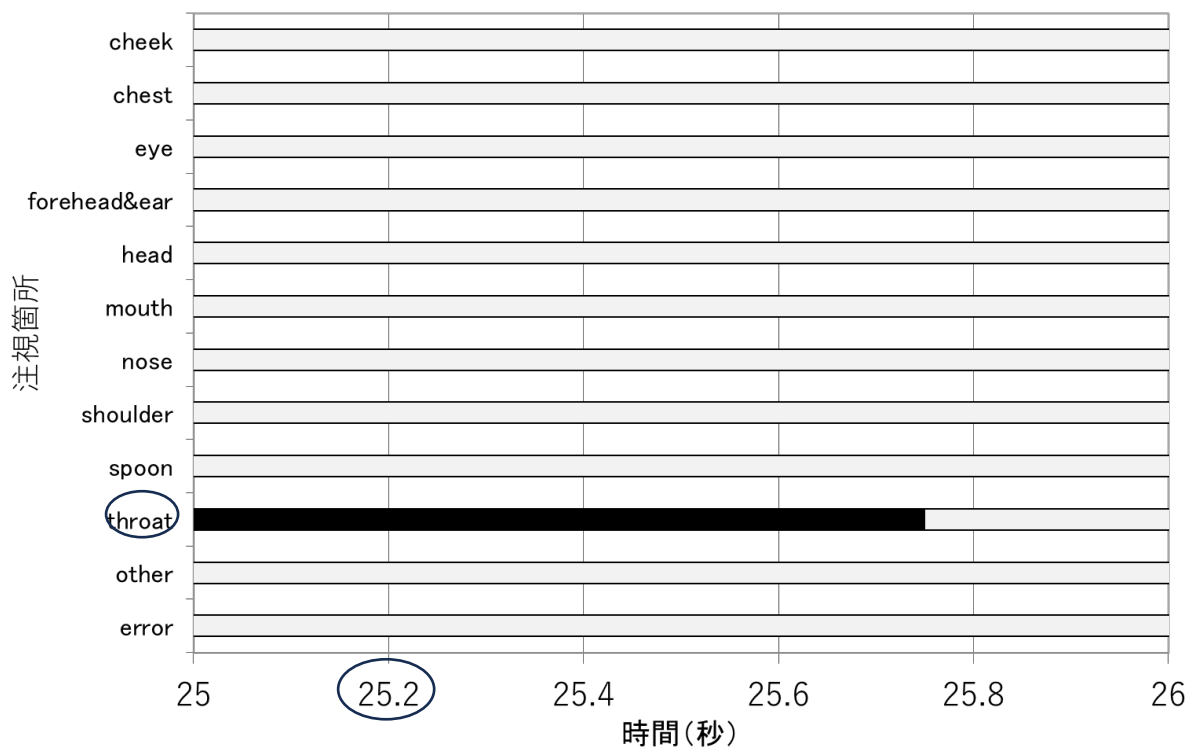


図. 15 ひやり①の2回目の視点移動の様子

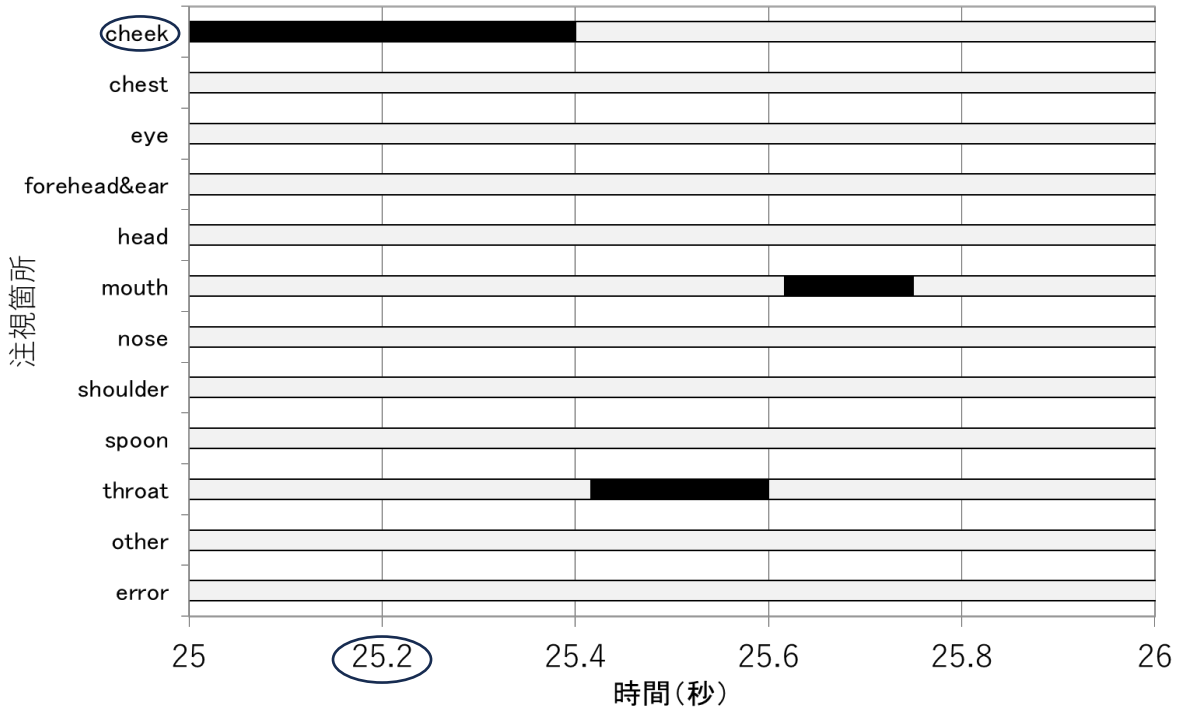


図. 16 ひやり②の2回目の視点移動の様子

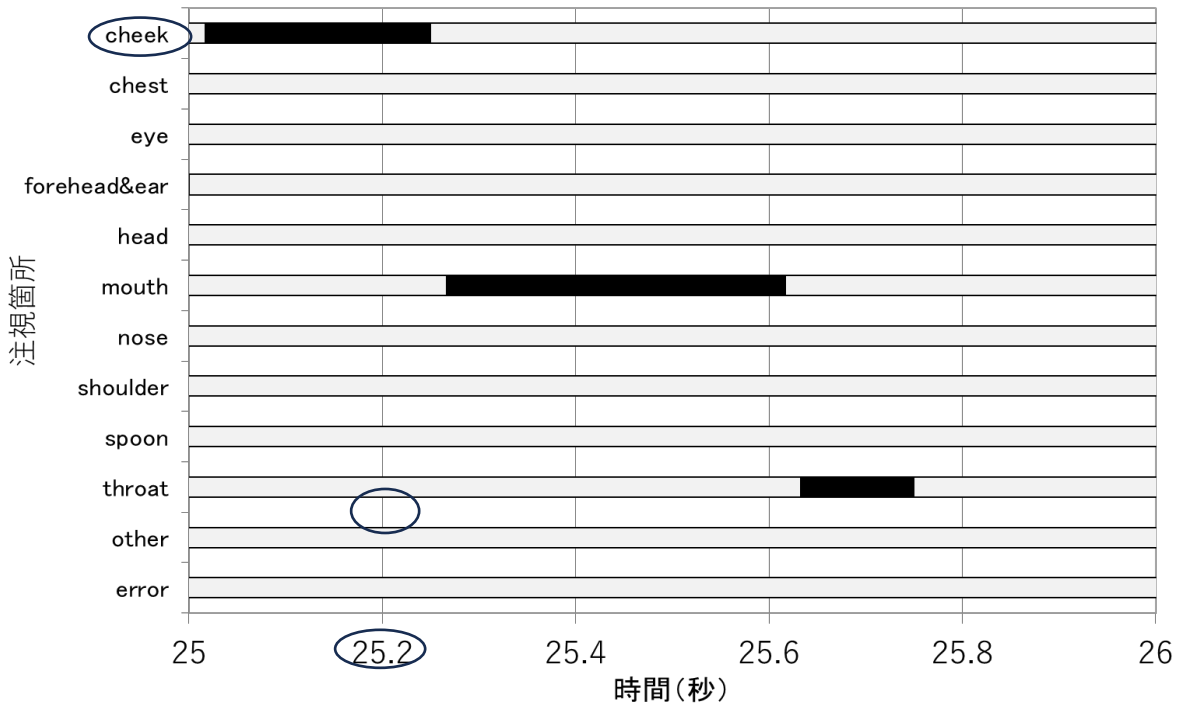


図. 17 ひやり③の2回目の視点移動の様子

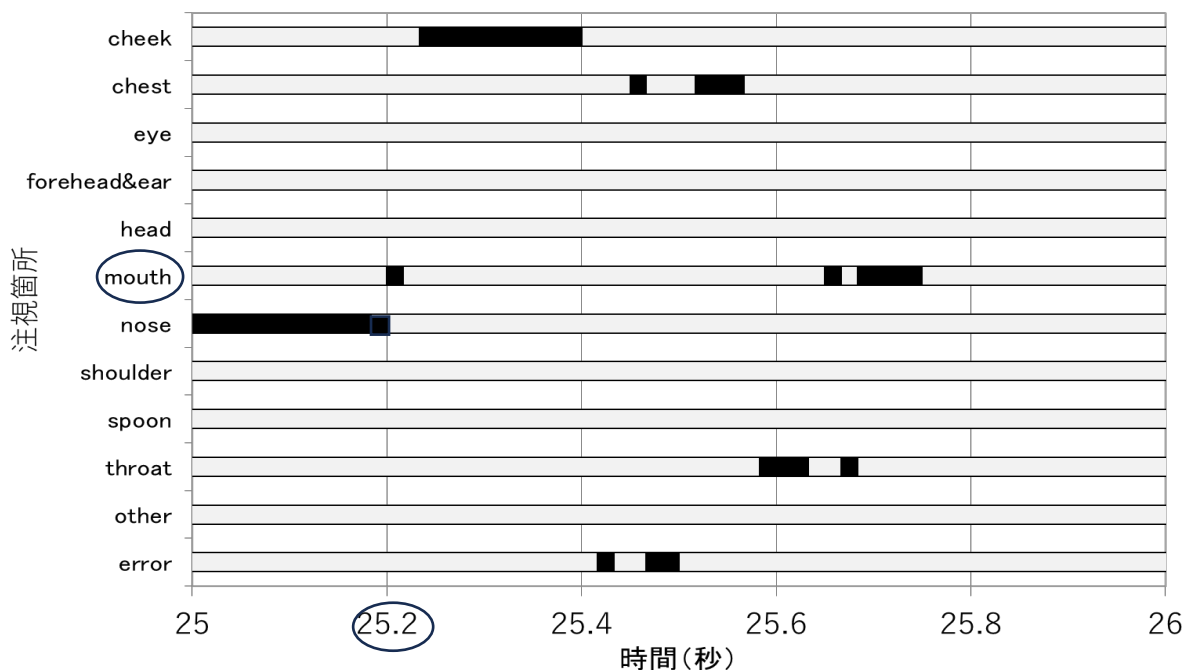


図. 18 ひやり④の2回目の視点移動の様子

付記

本研究は JSPS 科研費 (22K21318) の助成を受けた研究成果の一部である。

引用文献

1) 総務省統計局 (2025) 「統計からみた我が国の高齢者—「敬老の日」にちなんで—」  
[https://www.stat.go.jp/data/topics/pdf/to\\_pi146\\_01.pdf](https://www.stat.go.jp/data/topics/pdf/to_pi146_01.pdf) (2025. 10. 23)

2) 国立社会保障・人口問題研究所(2025) 「第9回人口移動調査」  
<https://www.ipss.go.jp/psidou/j/migration/m09/ido9gaiyou.pdf> (2025. 10. 23)

3) 厚生労働省 (2025) 「介護保険事業状況報告の概要 (令和7年4月暫定版)」

[https://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/osirase/jigyo/m24/dl/2404a.pdf\(saishuukusesu](https://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/osirase/jigyo/m24/dl/2404a.pdf(saishuukusesu)  
 (202511. 5)

4) 厚生労働省(2021) 「第8期介護保険事業計画に基づく介護職員の必要数について」

[https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000207323\\_00005.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000207323_00005.html) (2025. 10. 23)

5) 厚生労働省(2021) 「第8期介護保険事業計画に基づく介護職員の必要数 (都道府県別)」  
<https://www.mhlw.go.jp/content/12004000/00804132.pdf> (2025. 11. 5)

6) 福田亮子、吉田可奈子、小野雄太郎、松原仁、工藤正博 (2021) 「視線計測を用いた熟練介護士の特徴抽出」人工知能学会第二種研究会資料 社会における A 研究会 SIG-SAI-012-

12

7) 杉浦元亮 (2009) 「眼球運動と視覚的注意」  
『心理学評論』52 巻1号

8) 伊藤美加子、後藤彰彦、藤田杏純実 (2025)  
「高齢者介護福祉施設における食事介助場面の  
動画を用いた注視点計測研究」東大阪大学短期  
大学部国際介護研究センター『多文化と介護』  
vol. 2

## 実践研究

### 介護福祉学科における生物学教育の意義と共通言語としての日本語の役割

#### The Significance of Biology Education in Care and Welfare Studies and the Role of Japanese as a Common Language

傘 郁子<sup>1)</sup>

1) 東大阪大学短期大学部介護福祉学科

Ikuko KARAKASA

Department of Social Care, Higashiosaka Junior College

#### 抄録

本稿では、介護福祉士養成課程における生物学教育において、日本語を共通言語とすることの教育的意義を明らかにする。多国籍の留学生が在籍する本学では、授業は日本語で行われている。生物学教育は自然科学の知識習得に加え、高齢者の身体的・生理的状态を科学的に理解する基盤を提供する。また、生命活動を社会的・文化的文脈で捉える視点も重視される。そこで「人の成長過程」を学んだ後、日本舞踊の振りで表現するアクティブラーニングを実施した。この学びは知識の再構成と他者への伝達を通じて“生きた知識”へと昇華し、日本文化理解と介護現場への適応力を高める。言語と文化の一致が学びの質に与える影響について考察する。

Key words: 共通言語, 介護福祉教育, 生物学, 英語, 日本語

#### はじめに

本学には、介護福祉士を目指す多数の留学生が在籍している。これらの留学生および日本人学生の多くは、介護福祉士の資格を取得し、日本国内の介護現場での就労を目指している。例年留学生の出身国は多岐にわたり、2025年現在、1年生10カ国、2年生8カ国の学生が在学している(図1)。介護福祉士養成教育では、すべての教科が日本語でおこなわれている。

介護福祉士養成教育の中で履修する生物学は、生物や人間などの「生命」の基本的な仕組みを理解することを目的とした科目(「生物学」や「生命科学」など。厚生労働省, 2016)<sup>1)</sup>である。本科目は、自然科学の知識を習得するだけでなく、介護の現場にお

いて高齢者の身体的・生理的状态を科学的に理解するための基盤を提供するものである。特に介護の実践においては、高齢者がどのような生物学的状態にあるのかを把握することが不可欠である。加齢に伴う身体機能の変化や疾患の発症メカニズムを理解することにより、より適切な支援やケアの提供が可能となる。さらに、人間の生命活動は、単なる生物学的現象として捉えるだけでは十分とは言えない。人間は社会的・文化的な環境の中で生まれ、成長し、生活する存在であり、その生命活動は社会や文化と密接に関係している。したがって、生物学の教育においても、人間を「生命」という孤立した存在としてではなく、社会的・文化的背景とともに理解する視点が求められる。

受付日 2025年12月1日/受理日 2026年2月19日 [連絡先] (勤) 〒577-8567 東大阪西市西堤学園町 3-1-1

このような教育的背景を踏まえると、生物学は介護の専門科目ではないものの、介護において重要な基礎科目であり、高齢者の身体的・生理的理解に欠かせない知識を提供するものである。また、こうした科目を日本語で教育することには、単なる言語習得を超えた教育的意義が存在する。

本稿では、異なる文化的背景を持つ留学生が日本語を共通言語として生物学を学ぶことの意義、すなわち教育の場における「共通言語」とは何かについて、教育現場の視点から考察を試みる。

## I. 介護福祉教育における「共通言語」としての日本語の意義とその必然性

介護福祉養成課程での教育では、日本語が共通言語として用いられている<sup>2)</sup>。この言語選択は、介護福祉分野の実践的・文化的背景に基づく明確な根拠が存在する。

第一に、介護サービスの利用者の多くは日本語しか話さず、方言や曖昧な表現、さらには非言語的なニュアンスを含めたコミュニケーション能力が求められる。高齢者との信頼関係を築く上では、日本語による繊細な対話力は欠かせない。

第二に、介護現場では、介護記録の記入、申し送り、緊急時の対応などの業務はすべて日本語で行われる。これらの業務は、単なる言語理解を超えた即応性と正確性が求められるため、英語など他言語では対応が困難である。

第三に、介護は単なる身体的支援（食事、排泄、入浴など）に留まらず、介護の対象となる高齢者（多くが日本語が母語）の生活文化や価値観に根ざしたケアを提供する必要がある。こうした文化的背景を理解し、それに即した支援を行うためには、日本語による教育が不可欠である。

加えて、介護という仕事の本質は、「何かをしてあげる」「言われたとおりにしてあげる」といった一方向的な支援を提供するものではない。介護の対象となる高齢者は、長年社会で生活し、様々な経験を積み重ねてきた人生の先輩であり、時に介護者にとっての「先生」とも言える存在である。そのような状況においては、利用者を尊厳ある存在として敬意をもって対応し、介護者自身も利用者から多くを学ぶという姿勢が求められる。これは、介護福祉教育において人間理解と相互尊重の価値を育む上で、極めて重要な視点である。

このような背景の中、多様な母語を持つ学生が在籍する教育現場では、日本語が自然な共通語として最も機能する言語になる。

一般的に「国際化」と聞くと、英語を共通語とする教育が当然視されがちである<sup>3)</sup>。しかし、教育における言語の選定は、単に国際的な通用性だけでな

く、その分野において最も多くの研究や実践が蓄積され、知見が集約されている言語であるかどうかが重要である。介護福祉教育を支える周辺学問領域——たとえば生物学、心理学、社会学、倫理学、医学、歯学、薬学、工学、看護学、栄養学など——は、いずれも日本語で初歩から専門的内容まで体系的に学ぶことが可能である。特に生物学は、生命の基本的な仕組みを理解することを目的とし、細胞レベルの構造から個体の生理機能、さらには老化や疾患のメカニズムまで、介護に直結する知識を提供する。こうした学問領域が日本語で網羅的に学べる環境は、介護福祉士を目指す学生にとって極めて有利であり、言語的な障壁を越えて専門性を高めることができる。

このような視点から見ると、日本の介護福祉教育は、日本人学生のみならず留学生にとっても、非常に質の高い国際的教育を提供していると言える。多国籍の学生が集う環境においては、互いの文化や風習、個性を尊重し合う姿勢が自然に育まれており、学生間の関係性にも良好な影響を与えている。介護福祉分野においては、日本語がまさにその役割を果たしており、日本語で教育が行われていること自体が、国際化された教育環境であると捉えることができる。

さらに、日本人学生は、留学生とのコミュニケーションにおいて、分かりやすく伝えることを意識して努力している。また、異なる母語を持つ留学生同士も、日本語を共通言語として使用するため、互いに丁寧なコミュニケーションを心がけるようになる。こうした姿勢が、日本人学生を含む学生間において、礼儀正しく思いやりのある関係性を築き、各学生が自分のペースで安心して大学生活を送ることにつながっている。

このような環境が自然に形成されている背景には、入学当初から「多国籍であること」が前提となっている点が挙げられる。学生たちは、自分とは異なる文化的背景を持つ他者と共に学ぶことが当たり前の状況の中で、「違いを尊重する」という意識を自然に身につけていると考えられる。これは、他者理解と共感を基盤とする介護福祉という分野において、極めて重要な教育的成果である。

そこで、1学年に在籍する学生126名を対象に、「会話」「聞く」「読む」「書く」「日常語」の5技能に関する言語の自己評価アンケート（図2）を実施した。回答にあたっては、評価の曖昧さを避けるため、「できる」と明確に判断できる項目のみにチェックを入れる形式とした。学生の出身国別人数割合については表1に示している。

アンケートの結果、5技能のうち少なくとも1つ以上の技能について「できる」とされた言語は、日

本語(126人)、英語(102人)、ネパール語(54人)、フィリピン語(27人)、ヒンディー語(24人)、ビルマ語(15人)、ベトナム語(14人)、ベンガル語(12人)、セブアノ語(6人)、韓国語(4人)、標準中国語(4人)、マイティリ語(4人)、呉語(2人)、インドネシア語(2人)、アラビア語(2人)、閩語(1人)、タミル語(1人)、ジャワ語(1人)、シンハラ語(1人)、カンカナイ語(1人)、ウルドゥー語(1人)、イロカノ語(1人)、イバロイ語(1人)の計23言語であった。この中で、日本語と英語に絞って、授業を受けるために必要とされる最低限の言語技能である「聞く」「読む」「書く」の3技能すべてにチェックが入っていた学生の割合は、日本語では98%(124/126人)、英語では50%(63/126人)であった。留学生は英語を母語としない国の出身であり、日本語については本学入学前に日本語学校で学習していることから、この結果は妥当であるといえる。注目すべきは、英語が世界的に広く用いられる共通語としての地位を確立していると一般に考えられているにもかかわらず、アジアからの留学生の中で、英語で授業を受けるのに必要な言語力が「ある」と自己評価した学生がわずか50%にとどまっている点である。つまり、留学生にとって、授業が日本語で行われるか英語で行われるかは、「国際化」の指標とはなっていないということである。いずれにせよ、日本語か英語のいずれかを学習しなければならないという点に変わりはない。したがって、教育における優先順位は、「どの言語で学ぶことが、その分野において質の高い教育環境を得られるか」によって決定されるべきである。

特に、日本語を介護分野の共通言語とすることは、極めて理にかなっている。介護は、生物学、心理学、社会学、倫理学、医学、歯学、薬学、工学、看護学、栄養学など、実に多岐にわたる専門領域によって構成されており、これらの知識や技術は日本語によって体系的に整理・共有されている。基礎的な理論から最新の研究成果に至るまで、日本語で網羅できる環境が整っていることは、専門職間の円滑な連携を促進し、利用者との的確なコミュニケーションを可能にするという点で、大きな利点である。さらに、日本語を共通言語とすることで、現場における実践知と学術的知見との橋渡しが容易となり、介護の質的向上や研究の深化にも寄与する。

## II. 言語の統一性がもたらす教育効果と実践的意義

本学の生物学の授業では、生物学の基礎から介護現場への応用までを、一貫して日本語で実施している(表1参照)。授業方法としては、絵を盛り込んだ配付資料、パワーポイントや動画などの視聴覚教材、板書、書き込み可能な空欄を設けた資料、アクティ

ブラーニングなどを組み合わせ、日本語を母語としない学生を含めて丁寧に展開している。この取り組みは、単なる言語選択の問題にとどまらず、教育の質および実践的有用性を左右する重要な要素である。

アクティブラーニングでは、介護福祉士養成課程における『生物学』の単なる知識伝達にとどまらず、学習者の身体性や表現力を伴った手法を取り入れている。その1つとして、「人が生まれてから成長するまでの過程」を授業で学んだあと、それを舞扇を用いた日本舞踊の簡単な振りを通して身体で表現する学びを実施した。このような学びは、単なる記憶ではなく、学んだ知識を自分の中で再構成し、他者に伝える形で“生きた知識”に昇華させる役割を果たす。さらに、介護の現場では日本文化(特に高齢者文化)への理解も不可欠であり、日本舞踊などの古典芸能に触れることは、日本社会での介護の現場理解にもつながる教育的効果を持つ。こうした学びは、「どの言語で実施するか」によってその効果が大きく左右される。たとえばこのアクティブラーニングを英語で行った場合、指導者も学習者も英語を母語としない中で、文化的に深い背景を持つ表現活動を行うことになり、表現が不自然になりやすく、理解が形式的にとどまる。これはまさに、“木に竹を接いだ”ような状況であり、学習者の内面に定着する深い学びとはなりにくい。一方、日本語で行うことで、言語と文化が一致し、学びがより本質的かつ統合的なものになると考えられる。

このアクティブラーニング型の授業を2025年度の1年生126名におこなった。授業の開始前と終了後に図3に示したアンケートを実施し、その結果を図4に示した。

授業前のアンケートでは、「1. 少しでも見たり聞いたりしたことのある芸能名」について、「歌舞伎」は58%の学生が認知していた一方で、「全く知らない(ありません)」と回答した学生も33%存在した。さらに、「2. 少しでもおこなったり参加したことのある芸能名」については、「全く知らない(ありません)」と回答した学生が83%に上った。そのため、「3. 芸能が介護・福祉に役立つと思う理由」に対する7つの設問はいずれも、肯定的な回答率が29%以下にとどまっていた。

一方、授業後のアンケートでは、「1. 少しでも見たり聞いたりしたことのある芸能名」として、「歌舞伎」は96%、「日本舞踊」は83%の学生が知っていると回答し、「全く知らない(ありません)」の回答は1%にまで減少した。また、「2. 少しでもおこなったり参加したことのある芸能名」では、「歌舞伎」79%、「日本舞踊」97%と大幅に増加し、「ありません」と答えた学生は1%にとどまった。「3. 芸能が介護・福祉に役立つと思う理由」においては、「⑤利用

者さんの気持ちをより深く理解し、共感する力を養うことができる。」が 51%であったものの、それ以外の項目はすべて 81%以上がチェックされていた。

本授業の結果から、アクティブラーニング型の授業が生物学に関する学生の知識理解を深めたことに加え、その知識を介護・福祉の現場で活用するために、芸能が持つ有用性が明らかとなった。特に、身体を使って学ぶというアクティブラーニングの手法が、単なる知識の伝達にとどまらず、学習者が自らの身体性や表現力を通じて深い理解を得る助けとなることが確認された。これにより、教育は単なる知識の伝達にとどまらず、文化的・身体的・社会的文脈の中でその知識を“生きたもの”として体験させる営みであるということがわかる。

さらに、このようなアクティブラーニングを取り入れた授業において、学習の質を高めるためには、教育言語の選択が非常に重要であることが示唆された。教育言語は単なる伝達手段にとどまらず、学びの深さや本質に大きな影響を与える要素であり、その選択が学習者の理解の質を大きく左右することは明らかである。したがって、学習の過程において言語と文化が一致することが、学びをより本質的かつ統合的なものへとするために不可欠である。

また、表 1 の項目 3、6～16 に該当する授業においては、固定化された母語グループを避け、異なる母語を持つ学生同士がチームを組み、グループディスカッションを通じて共通の課題に取り組み、発表を行うことで、日本語による用語理解・概念定着および読み書きスキルの向上を図っている。また、表 1 の項目 1、2、4、5、17 に該当する授業では、留学生が発言しやすいように、言語的な壁を補助する目的で翻訳ツールの使用を許可し、視覚資料を活用している。さらに、すべての授業の終わりには、日本語で書き込みが可能な空欄を設けた資料に、学んだことや感じたことを記入する時間を設けている。

一方、近年のグローバル化の流れの中で、科学教育を英語で実施する試みも見られる<sup>3)</sup>。しかし、介護福祉士の養成においては、実際の現場で使用される言語が日本語であることから、基礎教育段階から日本語による用語理解と概念定着を図ることが不可欠である。

例えば、**生物学の基礎** (表 1:1 世界を構成する物質、水は軽いのに液体でいられる、量や濃度の単位; 2 生体物質、糖質、脂質、タンパク質、数を表す接頭語; 4 細胞、神経細胞、赤血球、精子、卵、受容体、酵素、栄養と代謝; 5 身体内での電気、興奮の伝達、神経伝達物質、心臓の収縮と拡張; 17 ホメオスタシス、生体恒常性)を**英語で学習した場合、介護への応用段階** (表 1:3 身体内外の圧力、高血

圧、最高血圧、最低血圧; 6 介護現場の薬の事故、誤飲、誤嚥、保管; 7 介護福祉士が行っていい薬の介助; 8 薬の血中濃度; 9 薬の飲み合わせ、グレープフルーツ、アルコール; 10 薬の剤形、粉薬、カプセル、錠剤、噴霧剤、注射剤; 11 薬の副作用; 12 特別養護老人ホームに入所している K さん、薬の服用拒否; 13 薬を服用する時の飲用液体; 14 お薬手帳のこと; 15 薬の服薬時間のこと; 16 薬介助コミュニケーションのための認知症サポーター養成講座)で**日本語に切り替えることになり、用語の不一致や説明の断絶が生じる可能性が高い**。これは、学習者の理解を妨げるだけでなく、現場での即応力や安全性にも影響を及ぼす。

さらに、介護の応用部分まで英語で実施した場合、実践的な場面で役立つ知識 (表 1: 6、7、12、14、16) となる危険性がある。介護現場では、利用者とのコミュニケーション、医師・看護師・薬剤師との連携、記録の記載など、すべてが日本語で行われる。したがって、教育段階から日本語による専門用語の理解と運用能力を養うことは、介護福祉士としての実践力を高める上で不可欠である。

加えて、日本語で生物学を学習していれば、現場で必要となるさらなる知識を、日本語の書籍や資料から主体的に得ることが可能となる。これは、学習者が卒業後も継続的に知識を更新し、専門性を高めていく上で大きな利点となる。言語の統一は、学びの継続性と自己学習力の育成にも寄与する。

以上のように、言語の統一性は、知識の連続性、応用力の確保、現場での実効性を担保するための重要な教育設計の柱であり、介護教育における根幹をなすものである。

### Ⅲ. 課題と展望

留学生の日本語習得に関しては、同じ母語を持つ留学生の人数が影響を及ぼす傾向がある。例えば、同じ母語の留学生が多数在籍している場合、授業外の時間に母語で会話する機会が多くなり、日本語を使用する場面が限られるため、習得の進度が遅くなる傾向がある。一方で、同じ母語の留学生が少ない場合、留学生同士の共通言語として日本語が用いられることが多くなり、日常的に日本語を使う機会が増えることで、習得が比較的早く進む傾向が見られる。

しかしその一方で、異なる母語を持つ留学生同士が学習内容について話し合う際、それぞれが自分の母語を用いることで、他の留学生が会話の内容を理解できず、意思疎通が困難になる場合がある。特に、その母語を話せない留学生にとっては、何が話されているのか分からず、疎外感を抱くことも少なくな

い。このような状況は、言語的・文化的障壁を一層深める要因となり得るため、教育現場では多言語環境に配慮した支援や、日本語を共通言語とする交流の促進が求められる。

このような状況を改善するためには、授業において全員が積極的に日本語を使用し、誰もが参加しやすい環境づくりを工夫することが重要である。全員参加型の授業設計や、協働的な活動を通じて日本語を媒介としたコミュニケーションの機会を増やすことで、言語的・文化的な障壁を緩和し、留学生同士の相互理解と学習効果の向上が期待される。

#### IV. 研究の倫理的配慮

対象となる学生に対して研究の目的、プライバシーの保護、本研究の目的以外にデータを使用しないことを文書および口頭にて説明し、同意を得られた学生のみを調査対象とした。なお、本研究は東大阪大学・東大阪大学短期大学部の「研究倫理審査委員会」の承認を得た（承認番号 短 R7-02、短 R7-05）。

#### 参考文献

- 1) 厚生労働省. (2016). 介護福祉士の養成カリキュラムについて (参考資料). 第7回社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会.  
[https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu\\_Shakaihoshoutantou/0000142797.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000142797.pdf) (参照日: 2025年8月22日)
- 2) 文部科学省. (令和6年11月). 日本語教育関係施策等の推進状況について. p. 57, 59, 61.  
[https://www.mext.go.jp/content/20241125-mxt\\_nihongo02-000038905\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20241125-mxt_nihongo02-000038905_4.pdf) (参照日: 2025年10月14日)
- 3) スティーブ・マッカーティ. 日本でグローバル・ファカルティ・ディベロップメントのニーズに応える. チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) Child Research Net 2019年3月1日掲載; 文部科学省. スーパーグローバル大学創成支援.  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1360288.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1360288.htm) (参照日: 2025年9月23日); 日本学術振興会. スーパーグローバル大学創成支援事業. <https://www.jsps.go.jp/j-sgu/> (参照日: 2025年9月23日)

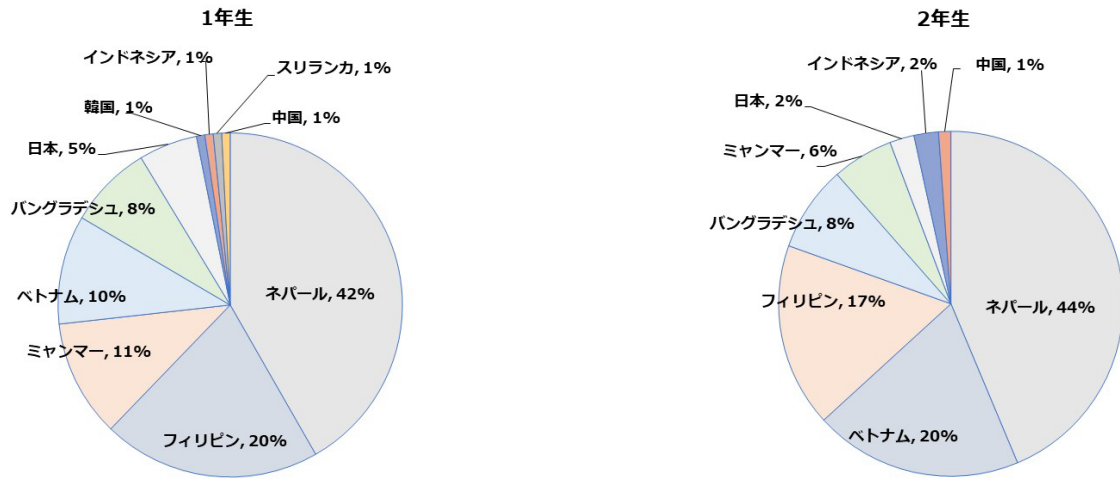


図 1 介護福祉学科 1 年生と 2 年生の入学時の国籍ごとの人数割合

学籍番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

みなさんの言語スキル自己評価について記入してください。

言語名	Language Name (English)	会話ができる	聞き取ることができる	読むことができる	書くことができる	普段一番使う言語にチェックを入れて下さい
日本語 (にほんご)	Japanese	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
英語 (English)	English	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ネパール語 (नेपाली)	Nepali	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
マイティリ語 (मैथिली)	Maithili	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
フィリピン語 (Filipino)	Filipino	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
セブアノ語 (Cebuano)	Cebuano	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ビルマ語 (မြန်မာဘာသာ)	Burmese	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
シャン語 (ရှမ်း)	Shan	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ベトナム語 (Tiếng Việt)	Vietnamese	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ムオン語 (Tiếng Mường)	Muong	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ベンガル語 (বাংলা)	Bangla	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
チャクマ語 (চাকমা)	Chakma	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
サンタル語 (ᱥᱟᱱᱛᱟᱲ)	Santali	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
韓国語 (한국어)	Korean	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
インドネシア語 (Bahasa Indonesia)	Indonesian	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
ジャワ語 (ꦗꦮꦗꦮ)	Javanese	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
スダダ語 (ᮊᮧᮒ᮪ᮓᮥᮀ)	Sundanese	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
シンハラ語 (සිංහල)	Sinhala	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
タミル語 (தமிழ்)	Tamil	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
標準中国語 (普通話)	Mandarin Chinese	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
広東語 (粵語)	Cantonese	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
呉語 (吳語)	Wu Chinese	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
閩語 (閩語)	Min Chinese	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
その他の言語		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

表 1 生物学の講義内容

項目	講義内容
	<p>絵を盛り込んだ配付資料 パワーポイントや動画などの視聴覚教材を使う                  パワーポイント・板書 書き込むことができる空欄を設けた資料</p>
<p>1 世界を構成する物質 水は軽いのに液体でいられる 量や濃度の単位</p>	<p>世界を構成する物質、元素、原子、分子について簡単に学ぶ。次に、生体に含まれる最大の成分である水は「身近で特殊な存在」であること、①常温中に液体で存在できる理由 ②生体反応が起こる場になる理由 ③凍ると大きくなる理由を学ぶ。物質の濃度（重量%濃度）、モル濃度、当量、酸と塩基、pH、量や濃度の単位について、日常生活で使用している具体例をあげる。例えば、訪問介護先の利用者様に「このあさり、3%塩水につけたいの」と言われた時、どうしますか？との問いかけ問題で、パーセント濃度の理解を深める。</p>
<p>2 生体物質 糖質 脂質 タンパク質 数を表す接頭語</p>	<p>生体物質の重要な構成成分である糖質、脂質、タンパク質、核酸の構造と機能を学ぶ。例えば、「甘い糖」と「甘くない糖」何が違うか？構造の違いは僅かであること、それらは食べ物だけではなく生体中に多く存在していることなどである。また、糖尿病に關係がある「血糖値」は血液中の糖（グルコース）の濃度であること、その血中グルコース濃度は、草食動物・肉食動物・人間それぞれでほぼ一定であること等、既に知っている知識と講義内容が繋がるように工夫する。さらに、「数を表す接頭語モノ・ジ・トリ・・・」を日常語の例と共に学ぶ。</p>
<p>3 身体内外の圧力 高血圧 最高血圧 最低血圧</p>	<p>講義のイントロ部分で、身近に、「高血圧のために毎日薬を服用している方はいませんか？」「しょっちゅう立ちくらみが起きて悩んでいる学生の方はいませんか？」と問いかける。そして、「圧力」は、日常でも「無言の圧力」「言葉の圧力」などと使うが、身体の中で重要なものは何をしていることを知る。その後、血圧について詳しく見て行く。「収縮期血圧・拡張期血圧とは？」「100mmHgの血圧とは？」「心臓から大動脈に拍出された血液には、なぜ高い圧力をかける必要があるのか？」ということから、代謝の結果生じた不要・有害な物質として排泄される尿を作るために血圧が必要であるなどを学ぶ。</p>
<p>4 細胞 神経細胞 赤血球 精子 卵 受容体 酵素 栄養と代謝</p>	<p>私たちの身体は約60兆個の細胞でできている。最初はまだ1個の受精卵であるが、これが細胞分裂を繰り返し、最終的に約60兆個という膨大な数になることを確認する。高校までに習った細胞の種類、その細胞の中にある小さな構造体である細胞小器官（ミトコンドリア・リソソーム・ゴルジ装置体・など）を思い出し、名前と役割を学ぶ。さらに、エネルギーについては、次のような問題「1日に食べる量が決まっているとする。これを1回の食事で全部食べてしまうと、何回かの食事に分けて食べるのとではどちらが太りやすいでしょう？」を考えながら学ぶ。</p>
<p>5 身体内での電気 興奮の伝達 神経伝達物質 心臓の収縮と拡張</p>	<p>イントロ部分で、電気は目に見えないが、身体活動（運動する・考える・覚える・悩む・恋をする）では電気が重要なはたらきをしていることを知る。例えば、心臓は心臓に起こる電氣的な変化であり、脳波は脳の膨大な数の神経細胞の間でやりとりされる電氣的活動であることを学ぶ。思考や記憶、恋といった感情の発現は、いくつもの神経細胞が複雑な神経回路を形成して生じるため、興奮の伝達が大切であることを確認し、神経伝達物質が隣の細胞を興奮させるメカニズムを詳しく学ぶ。</p>
<p>6 介護現場の薬の事故 誤飲 誤嚥 保管</p>	<p>導入部分で、介護現場での事故の内容は、転倒などの身体介助時の事故が多いが、薬の管理や服薬支援に関する事故も起きていることを知る。事故を防ぐには、どうしたら良いかを考えながら、次のような実際に起きている事故事例の具体的な内容を学ぶ。1. 嚥下における事故（誤飲・誤嚥・薬剤性潰瘍）2. 保管事故 3. 服用・使用上における事故（用法・用量の間違い・使用方法の間違い・薬剤の間違い・利用者の間違い）さらに、これらの薬の事故を防止するための対策や工夫点を考える。</p>
<p>7 介護福祉士が行っている 薬の介助</p>	<p>服薬に関する「原則として医行為ではない」としての行為を学ぶ。一定の条件下で、次の行為の介助を行うことは、原則として医行為に該当しない。1. 皮膚への軟膏の塗布（痔瘻の処置を除く）2. 皮膚への湿布の貼付 3. 点眼薬の点眼 4. 一包化された内服薬の内服 5. 肛門からの坐薬挿入または鼻錠粘貼への薬剤噴霧 また、この「一定条件下」としては患者の状態についても学ぶ。さらに、この一定条件下として定められている医師・歯科医師・薬剤師・看護職員の役割についても学ぶ。</p>
<p>8 薬の血中濃度</p>	<p>次の問題を考える。「Aさんは、1日2回、朝食後と夕食後に服用する薬を処方された。ある日の夕食中、朝食後に飲む薬を忘れてしまったことに気がついた。そこで、夕食後、朝と夜の薬両方をまとめて飲むことにした。」Aさんの判断は、正しいか？間違いないか？理由を薬の血中濃度から学ぶ。血中濃度は、血液中の薬の濃度のこと、通常、ちょうど良く効く状態になるように設計されている。血中濃度は、高すぎると効き目が過ぎて副作用の危険が高くなり、低すぎると効き目が弱く出ない、つまり、生体にとってどちらも良くないこと等を学ぶ。</p>
<p>9 薬の飲み合わせ グレープフルーツ アルコール</p>	<p>「食べ合わせが悪い（一緒に食べない方が良い）」という言葉聞いたことがありますか？西瓜と天竺麴、蕎麦と茄子・・・との呼びかけをもとに、薬にも飲み合わせがあることを知る。薬が体内で吸収・分布・代謝・排泄される際に、ほかの薬や飲食物に影響されることを知る。特に、飲食物は日頃、何気なく摂取しているものであるから、特に注意が必要である。グレープフルーツ、アルコール（お酒・ビール・ワインなど）、ビタミンKを多く含む食品（納豆・緑色野菜・クロレラ）、牛乳や乳製品など。薬と薬の相互作用も学ぶ。</p>
<p>10 薬の剤形 粉薬 錠剤 噴霧剤 注射剤</p>	<p>「どんな薬の形（剤形）があるのか？」を考え、薬の剤形はたくさんあること、その目的は「形状をより安定した状態に保つため・使用を容易にするため・十分に効果を出すため」などの理由から加工し製造されていることを知る。次の剤形の写真をしながら、その特徴を学ぶ。粉末（散在・細粒剤・顆粒剤・ドライシロップ剤）、カプセル剤、錠剤（裸錠・糖衣錠・コーティング錠・徐放錠）、チュアブル錠・OD錠・舌下錠・腸溶性錠剤・トロイチ剤・膠錠）、液剤（点眼剤・点鼻剤）、エアゾール吸入剤・ドライパウダー吸入剤、軟膏剤、坐剤、貼付剤（パップ剤・プラスター剤）、注射剤。</p>
<p>11 薬の副作用</p>	<p>薬を使用した時に、その使用目的以外に出る作用や健康に有害な作用が出た場合のことを、広く「副作用」と呼び、高熱を伴う発疹・目の充血・粘膜炎のたれ・吐き気・激しい下痢・冷や汗・体の震え・身に覚えのない筋肉痛・目や耳が聞こえにくい・尿が出にくい・息が苦しい・強い倦怠感・脱力感・手足のしびれ震え・あざがでやすい・めまい他、さまざまな症状があることを知る。介護職は、利用者の体調変化や日常動作の変化を注意して観察し、その変化が薬による影響のものであるかを医師や薬剤師に確認する必要がある。副作用は「恐れず、侮らず」であることを知る。</p>
<p>12 特別養護老人ホーム に入所しているKさん 薬の服用拒否</p>	<p>導入部分で次の問題を考える。「特別養護老人ホームに入所しているKさんは、食後に服薬しなければならぬ薬（錠剤・顆粒剤）を拒否しています。『のみたくない』と言っています。あなたならは対応できますか。』まず、Kさんが何故「のみたくない」と言ったのか、考えられることをできるだけ多く書き出してみる。薬が喉に引っかかるなど薬剤の物理的な理由、服用することによって症状に苦しんだことがあるなど薬剤による副作用と思われる理由、しばらく家族に会っていないから寂しくてという精神的な理由、・・・その後、その対応について考える。</p>
<p>13 薬を服用する時の飲 用液体</p>	<p>上記「9薬の飲み合わせ」に重なる部分もあるが、改めて、薬はどんな液体でのむか？種類は？量は？温度は？を考える。薬には、食べ物や飲み物との相互作用がある。ジュース・お茶・コーヒー・紅茶・牛乳・アルコール・コーラなどは、ある種の薬との相互作用で効果が強くなったり弱くなったり、体に良くない作用がでることがあることを知る。水か白湯でのむのが最も無難である。また、解熱鎮痛薬などは消化管への刺激が強く、十分な量の水と一緒にのみ、きちんと胃まで薬をいれないと、食道にひっかかって食道炎を起こす危険があること等を学ぶ。</p>
<p>14 お薬手帳のこと</p>	<p>一般に、薬を受け取る時には、処方された薬が書き込んである手帳を受け取る。さらに、お薬情報（薬の名前や効果、服薬方法、副作用、注意事項）が記載された紙も受け取る。そこで、実際に使用されている「お薬手帳」を手にとり、中に何を書くようになっていたかを確認する。この手帳を医療機関に持っていくのは、今朝までどのような薬をのんでいたか、投与されていたか、副作用はどうかかわかる。つまり、お薬手帳には、その人の服薬の歴史が書き込まれている。これらのことから、お薬手帳はその人の命を守る大切な手帳であることを学ぶ。</p>
<p>15 薬の服薬時間のこと</p>	<p>服薬時間は薬の特性に合わせて決められているため、決められた方法で服用しないと効果が現れなかったり、効果が強く現れすぎて危険であることを知る。指示された症状（痛みが強いなど）が出た時に服用する「頓服薬」以外は、食事や睡眠といった標準的な生活習慣に合わせて服用し、それは食事や睡眠のタイミングでは服用を忘れないという単純な理由もあるが、効果的に吸収される作用発揮が良い、副作用が出にくいなどを考慮して決められている場合もあることを知る。「起床時・食前・食直前・食直後・食後・食間・就寝前・時間ごと」などがある。</p>
<p>16 薬介助コミュニケーション のための認知症サ ポーター養成講座</p>	<p>高齢者になると複数の疾患を抱え、たくさんの薬を使用している。また、高齢者になると認知症を引き起こしやすくなる。認知症のこと、さまざまな授業で学んでいるため、基本的なこと（は理解している。ここでは、薬介助がスムーズに進むように、認知症サポーター養成講座を受講する。現在、「認知症サポーターキャラバン」が全国で展開されている。認知症サポーターは何か特別なことをする人ではなく、認知症について正しく理解し、偏見を持たず、認知症の人や家族を温かい目で見守る「応援者」であることを確認した。</p>
<p>17 ホメオスタシス 体恒常性</p>	<p>私たちが住み暮らしているこの世界の環境は、一定不変のものではない。暑い日もあれば寒い日もある。私たち自身も運動したり眠ったり、食事をする時間や食事をしない期間がある。このような外界の環境・身体状況の変化があっても、体内で行われる代謝は常に円滑に進められる必要がある。このためには、外界の環境・身体状況の変化があっても、体内の環境は狭い範囲で一定に保たれる必要がある。体内環境が一定に保たれることをホメオスタシス、日本語では生体恒常性という。ホメオスタシスが維持できなくなった状態が病気（疾患）である。</p>

学籍番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

日本の古典芸能について、次の1～3の質問に回答して下さい。

1. 少しでも見たり聞いたりした芸能名の□にチェックを付けて下さい。複数回答可

- |                             |                                      |                                |
|-----------------------------|--------------------------------------|--------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 能楽 | <input type="checkbox"/> 歌舞伎         | <input type="checkbox"/> 日本舞踊  |
| <input type="checkbox"/> 雅楽 | <input type="checkbox"/> 文楽（人形浄瑠璃文楽） | <input type="checkbox"/> ありません |

2. 少しでもおこなったり参加したことのある芸能名の□にチェックを付けて下さい。複数回答可

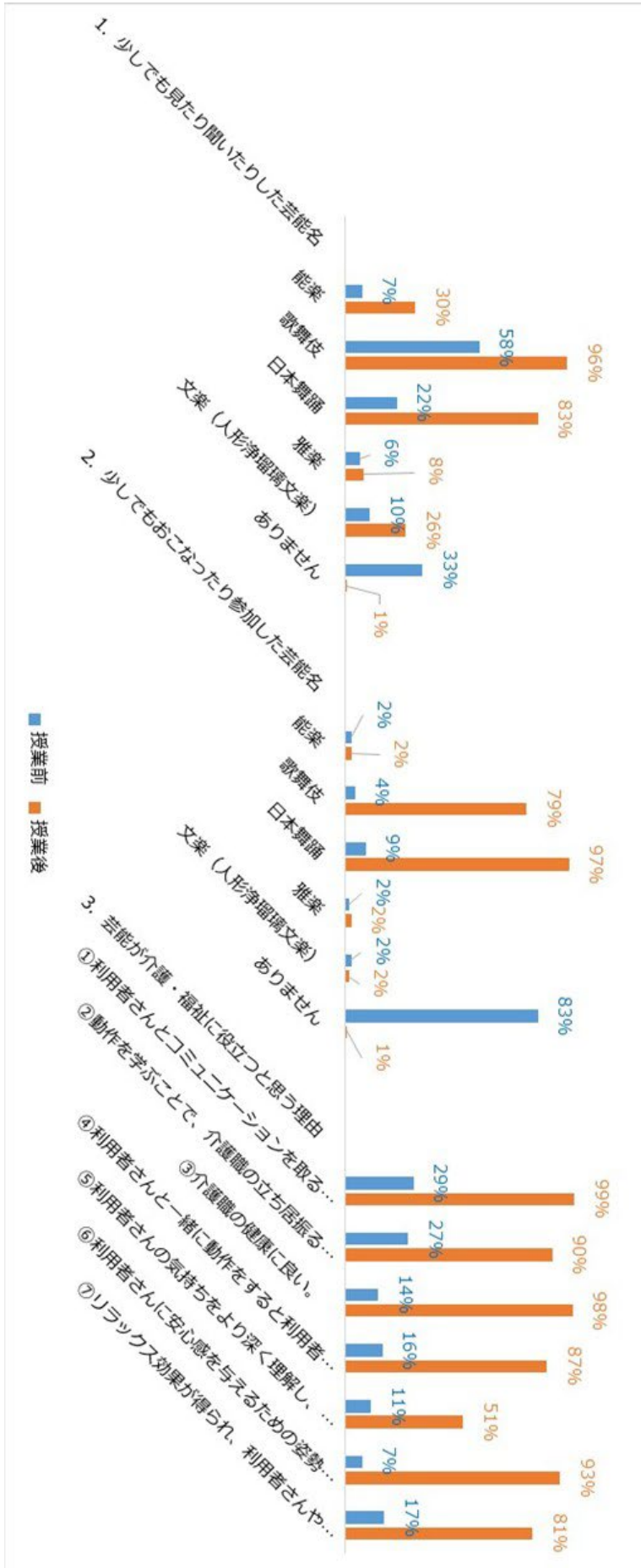
- |                             |                                      |                                |
|-----------------------------|--------------------------------------|--------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 能楽 | <input type="checkbox"/> 歌舞伎         | <input type="checkbox"/> 日本舞踊  |
| <input type="checkbox"/> 雅楽 | <input type="checkbox"/> 文楽（人形浄瑠璃文楽） | <input type="checkbox"/> ありません |

3. 能楽、歌舞伎、日本舞踊の知識があると介護・健康・福祉に、どのように役立つと思いますか。該当する項目の□にチェックを入れて下さい。複数回答可

- |                                     |                          |
|-------------------------------------|--------------------------|
| ① 利用者さんとコミュニケーションを取るときの話題ができる。      | <input type="checkbox"/> |
| ② 動作を学ぶことで、介護職の立ち居振る舞いが美しくなる。       | <input type="checkbox"/> |
| ③ 介護職の健康に良い。                        | <input type="checkbox"/> |
| ④ 利用者さんと一緒に動作をすると利用者さんの健康維持に役立つ。    | <input type="checkbox"/> |
| ⑤ 利用者さんの気持ちをより深く理解し、共感する力を養うことができる。 | <input type="checkbox"/> |
| ⑥ 利用者さんに安心感を与えるための姿勢や動作が習得できる。      | <input type="checkbox"/> |
| ⑦ リラックス効果が得られ、利用者さんや介護職の心の安定につながる。  | <input type="checkbox"/> |
| ⑧ その他（ _____ ）                      |                          |

図 3 日本の古典芸能についてのアンケート

図4 古典芸能についてのアンケート結果



資料

不登校児童生徒および保護者への支援内容の評価  
— For Everyone Study のアンケート調査、活動資料の分析から —  
Evaluation of support for homeschooled children and their guardians:  
Findings from the For Everyone Study questionnaire survey and analysis of  
activity materials

山田 克宏<sup>\*1</sup>

東大阪大学短期大学部介護福祉学科

Katsuhiko YAMADA

Department of Social Care, Higashiosaka Junior College

植竹 智央<sup>\*2</sup>

For Everyone Study

Tomohiro UETAKE

抄録

不登校児童生徒の数は、1998年以降小・中学校合計で127,682名から概ね増加傾向で推移し、2024年で34,482名となっている。その中で、不登校要因は、「生活リズムの不調」「親子のかかわりかたの問題」「友人関係をめぐる問題」など多岐にわたっている。そして、不登校児童生徒への支援では、「社会的に自立する」ことを目指し、個々の状況に応じて支援を行うとしている。具体的には、「安心できる居場所づくり」「子どもの変化に沿った最終目標や支援計画を実行する」である。課題は、児童の変化に沿った支援計画の作成、孤立感、不安感に寄り添うこと、人とのかかわりを進めることである。以上を踏まえ一般的な支援課題と不登校団体であるFor Everyone Study(以下、FES)の支援のあり方がどのような関係にあるかを明らかにする。FESの利用者へのアンケート調査および活動資料による分析結果は、業務報告書等で支援内容の見直しを行っていること。一般的な不登校児童生徒支援者より年齢差が小さい高校生、大学生にボランティアスタッフがかわっており、「斜めの関係」として関係が深まりやすい状況となっており、人とのかかわりが、自信を深めながら段階的に広がっていく可能性を高める効用があることが示唆された。

## I. 背景と目的

不登校児童生徒の数は、1998年で小・中学校合計で127,682名から概ね増加傾向で推移し<sup>1)</sup>、2015年に119,891名に一時的に

減少したものの2019年で181,272名となっている。また、90日以上欠席した者は、不登校児童生徒数の55.6%を占め、依然と

して長期に及ぶ不登校児童生徒が多い<sup>2)</sup>とされている。不登校要因は、「生活リズムの不調」「親子のかかわりかたの問題」「友人関係をめぐる問題」等多岐にわたる。そして、不登校児童生徒への支援について「社会的に自立する」ことを目指し、個々の状況に応じて支援を行う<sup>3)</sup>としており、ICTによる支援が行われているが、学習支援に偏重している。

問題行動を含む不登校児童生徒支援では、「子どもが安心できる場所を作る」「子どもの特性や現状をアセスメントする」「子どもが日常的に、自主的に適性行動が取れるように方法を教える」「子どもの変化に沿った最適な目標や支援計画を実行する」「支援者の、子どもの特性理解を促す」ということが実施されているが、その中には課題がある。①支援者の手が届きにくい、②進学に伴う課題、③子どもが抱える課題の多様化の3点である<sup>4)</sup>。

適応指導教室では、学習支援、体験活動の実施、保護者支援事業の実施を行っている。課題としてオンライン交流やメタバースによる居場所づくり、支援活動によるICTの活用の課題をあげている<sup>5)</sup>。電子メールを通じたカウンセリングおよび訪問活動では、メールに不登校児童生徒の感情の記載があった。また、人と面と向かって話すのは恥ずかしいが、電子メールなら気持ちが伝えられることの記述があることが示されている。その上で、このような対面ではない活動を、学校復帰<sup>6)</sup>へ繋げることが課題であることがわかる。無気力型の不登校となる生徒の中には、生活のリズムが崩れ、人との関わりにストレスを感じてしまい、学校での楽しい思い出が作りにくい状況になり、学校や

周囲への不信感、これからの将来に対する失望を感じていることが多く、孤立感や不安感に寄り添うこと、不登校児童生徒の特性に配慮したかかわり支援を課題としている<sup>7)</sup>。以上ことから、不登校児童生徒の変化に沿った支援計画の作成、孤立感、不安感に寄り添うこと、人とのかかわりを段階的進めることが不登校児童生徒への支援課題と言える。

以上を踏まえ、一般的な不登校児童生徒支援の課題と FES<sup>注1</sup>の支援のあり方がどのような関係にあるかを明らかにする。

## II. 方法

アンケート調査は、不登校児童生徒本人および不登校児童生徒から聞き取りが可能な保護者を対象に2024年12月に実施した(表1)。対象者は、11名である。回収率は、100%であった。

表1. アンケート項目

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. 回答者の属性について</li><li>2. 性別</li><li>3. 学年(2024年12月31日現在)</li><li>4. 学校に行かなくなった時は、自分の気持ちはどのようなものでしたか</li><li>5. 学校に行けない時の理由</li><li>6. FESでの活動を受けてどう思いましたか</li><li>7. FESでの活動を通じて、どのようなことを感じましたか</li></ol> |
|---|

また、FESの活動資料のアセスメントシート、不登校児童生徒に関するボランティアスタッフの業務報告書等の質的分析を行った。

## III. 倫理的配慮

対象となる不登校児童生徒および保護者に対して研究の目的、プライバシーの保護、本研究の目的以外にデータを使用しないことを文書および口頭にて説明を行った。なお、本研究は東大阪大学・東大阪大学短期大学部の「研究倫理審査委員会」の承認を得た(承認番号 短 R6-02)。

#### IV. 結果

アンケートの回答者数は、11名(有効回答11件の100%)で、本人8名(72.7%)、保護者が本人に確認して回答3名(27.3%)であった。性別は、女6名(54.5%)、男5名(45.5%)であった。

図1. 不登校児童生徒の属性(学年)

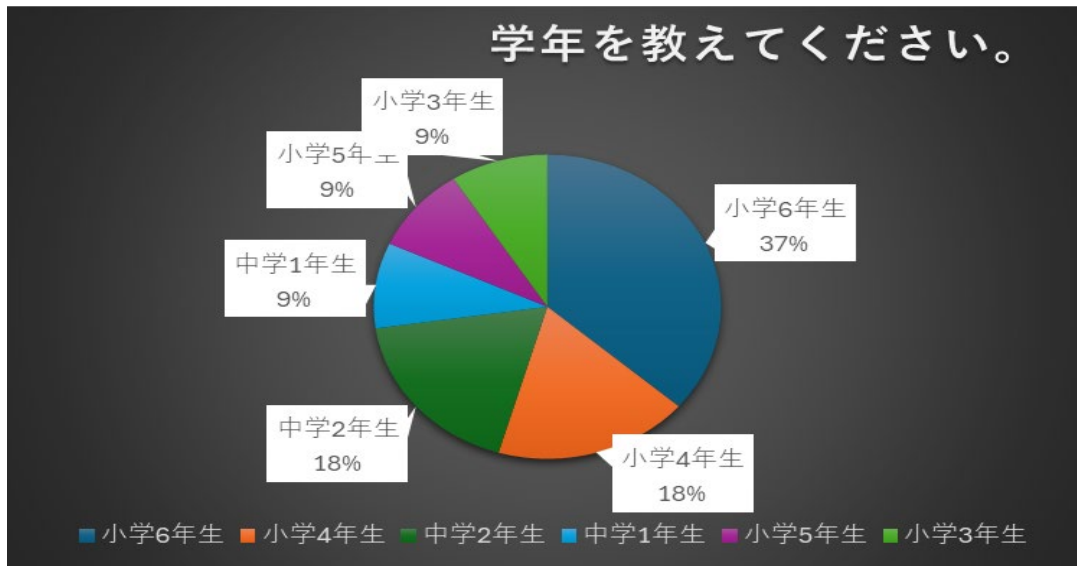


図2. 不登校児童生徒が学校に行けなくなった理由

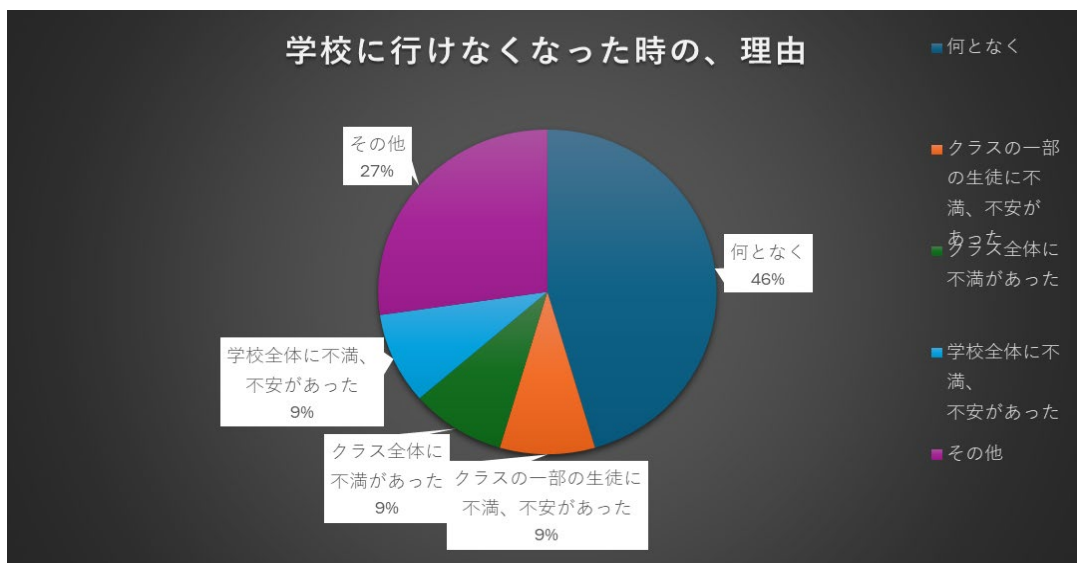


図 3. FES の活動を受けてどう思ったか

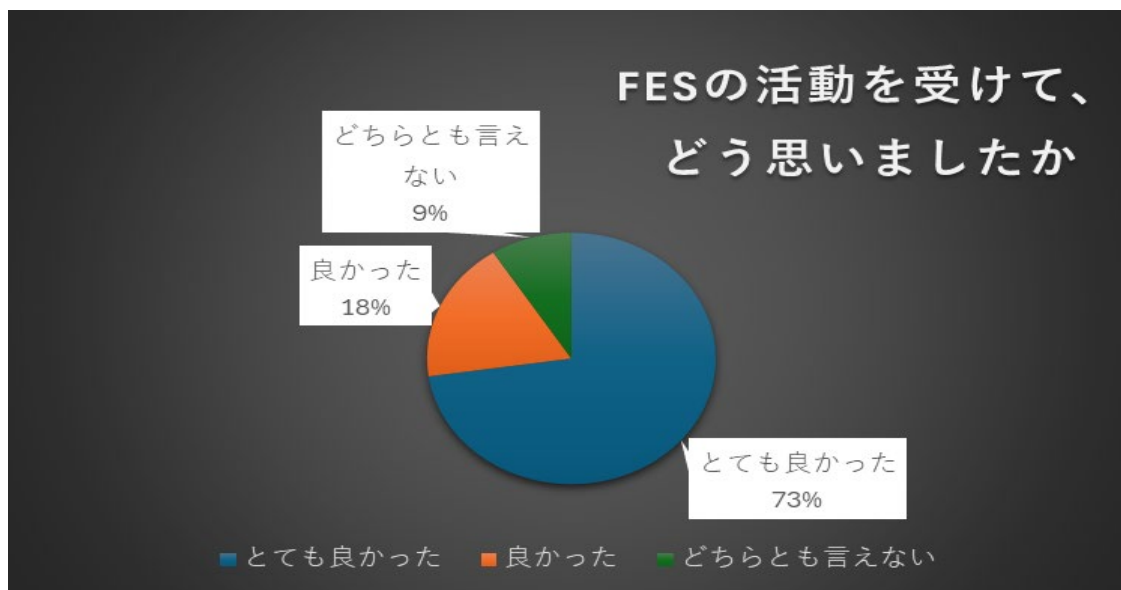
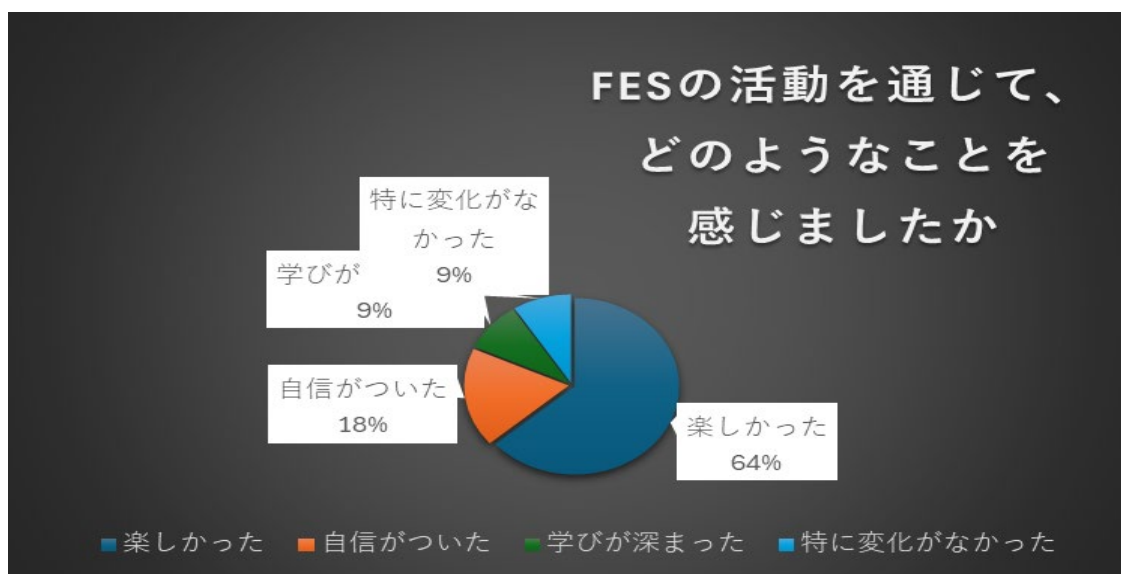


図 4. FES での活動を通じて、どのようなことを感じましたか



不登校児童生徒の学年は、小学 6 年 4 名 (38.4%)、中学 2 年生 2 名 (18.2%)、小学 4 年 2 名 (18.2%) であった (図 1)。学校に行かなくなった時の理由は、何となく 5 名 (45.5%)、その他 3 名 (27.3%)、学校全体に不満、不安がある 1 名 (9.1%)、クラス全体に不満、不安がある 1 名 (9.1%)、クラスの一部の生徒に不満、不安がある 1 名 (9.1%)

であった (図 2)。FES の活動を受けてどう思ったかという質問には、とてもよかった 8 名 (72.7%)、よかった 2 名 (18.2%)、どちらとも言えない 1 名 (9.1%) であった (図 3)。FES の活動を通じて、どのように感じましたかという設問には、楽しかった 7 名 (68.3%)、自信がついた 2 名 (18.2%)、学びが深まった 1 名 (9.1%) であった (図 4)。

次に、FES が不登校児童生徒の受け入れを行った際のアセスメント、不登校および登校しぶりの時期、発達障害の有無、学習状

況、FES への希望等のアセスメント(表 2)を実施している。

表 2. アセスメント項目

1. アドレス
2. 不登校児童生徒の氏名
3. 保護者の氏名
4. 子どもの学年
5. いつから不登校、登校しぶり <sup>※2</sup> になっているか
6. 不登校や登校しぶりの原因を教えてください
7. 子どもさんは、発達障害がありますか
8. 7. であると回答された方は、発達障害の診断または、傾向であてはまる項目にチェックをお願いします
ADHD、ASD、LD、その他
9. 子どもさんの学習状況を教えてください
10. ボランティアスタッフに求める性別

表 3. アセスメント情報の特記事項

誰の意見	内容
母親	学校に行けなくなってから人が怖くなり、ほとんど外出できない。
母親	2年経って、家では元気で過ごせるようになった。
母親	家に一人でいると罪悪感があるようだ。
母親	本人が勉強したいと思っているようなら勉強をさせてあげたい。
母親	少し上の高校生や大学生とコミュニケーションを取り、自信を付けて欲しい。
母親	痩せているのを気にして細いと言われるのがコンプレックスである。
母親	子どもの話し相手になって欲しい。
母親	人と話して楽しかったと言って欲しい。
母親	怒りやすい、きれやすいところがある。

実際にアセスメントした内容で、特徴的な項目は、以下の内容となる(表 3)。「学校に行けなくなってから人が怖くなり、ほとんど外出できない」、「2年経って、家では元氣

で過ごせるようになった」、「家に一人でいると罪悪感があるようだ」、「少し上の高校生や大学生とコミュニケーションを取り、自信を付けて欲しい」「人と話して楽しかった

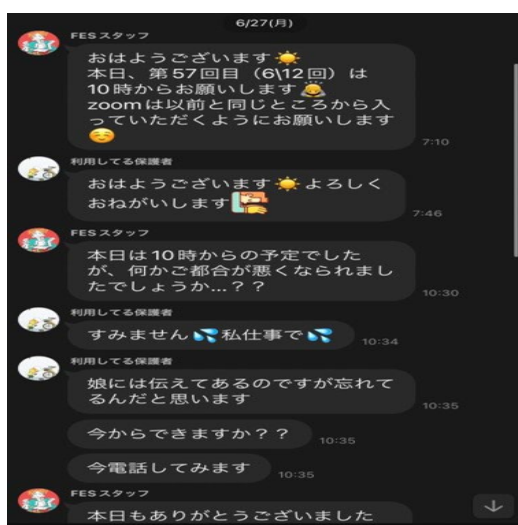
たと言って欲しい」「怒りやすく、きれやす  
 いという」という内容(表 3)であった。

表 4. FES スタッフと不登校児童生徒等のマッチング

自己紹介、FES の活動、サポート料の紹介	20 分
ヒアリングシートの項目ごとに質問、キャンセルポリシー	15 分
対象の子が参加、コーディネーター中心に話を回す	5 分～ 10 分
担当のスタッフが対象の子、スタッフへ質問をしていく（コーディネーターは見守り）	5 分
担当のスタッフと子だけ会話、学習ソフト 又は Youtube 等の画面共有を使用	10 分
次回の日程の確認	5 分

支援の初期段階は、ヒアリングシートの聞き取りから始まり、スタッフ・コーディネーターとの相互関係を深めた上で、支援内容の説明、要望を汲み取りながら支援をスタートさせる(表 4)。FES スタッフと保護者のやり取りから分かることは、「娘には伝えているんですが忘れてるんだと思います」「今からできますか」「電話してみます」というように丁寧なかかわりをしている(図 5)。

図 5. FES スタッフと保護者のやり取り



さて、FES スタッフは、養成プログラム・OJTを実施している、高校生・大学生の有償ボランティアである。

その内容は、以下の通りである。学生スタッフが FES 支援活動に加わり一か月以内には、オンラインでの支援活動を行うスタッフ向けの育成プログラムを実施する。育成プログラムの内容は、4つである。①知識(不登校の要因、統計等)、②支援活動の事例(実際の活動の様子の録画)、③獲得すべきスキル(傾聴力、伝える力、ICT スキル)、FES 活動の心得(『時間や約束を守る』)といった子どもたちと関わるうえで最低限すべきこと)から構成されている。また、組織のマネジメントは、FES の代表・学生リーダーを中心に3段階で行っている。具体的には、LINE を通じて、マネジメントを行っている。①スタッフ全体、②社会人スタッフ及び事務や書記、研究のフォローを行う学生が入っているグループ、③役職付きの社会人が入っているグループである。また、ZOOM 等によるミーティングを定期的実施している。

支援内容は、大きく分けてコミュニケーション支援と学習支援の2つがある。コミュニケーション支援では、カメラの ON・OFF の両方を可として、子どもの状況、状態に応じた個別支援を行っている。

具体的に子どもの趣味を重視して好きなゲームを取り入れた内容、チャットでしりとりを行う等内容は様々であるが、主目的がコミュニケーション能力の向上を目指している。

次にスタッフからの業務報告書であるが、Google フォームを使用し、日付、時間、担当学習支援では週 1 回実施、基本的に児童生徒が普段学習している教材を活用し、学

習習慣を身に付けるように主体性を重視し ながなされている。  
 ている。当事者、実施内容、特記事項の報告

表 5. 業務報告書中での特記事項

誰から	誰へ	特記事項
FES スタッフ	FES 事務局	今年度から学校に行き始めた。帰宅後疲労のため、支援の開始が 30 分遅れた。
FES スタッフ	FES 事務局	小学校 5 年生の女子は、自ら外へでることはほとんどないらしいが、外に出たいという意欲はみられた。
FES スタッフ	FES 事務局	勉強の時間が 30 分ほどかかったら途中から退屈そうであったが、ゲーム中は楽しい笑い声が聞こえました。まずは、勉強時間を 15 分ぐらいに収めるのがベストかと思います。
FES 事務局	FES スタッフ	保護者の依頼で勉強の量が多くなっている。児童は、もとは、ゲームの時間であったため、不満そうである。20 分であれば、良いとのこと。学校に行き始め、満点のテストを何枚か見せてくれた。
FES スタッフ	FES 事務局	事務局から保護者に連絡し、本人の希望を聞いている。そのため、安心して支援の時間の希望をスタッフに伝え、今日は、ゲームの時間になったとのこと。本人の希望が通ることを理解してもらうためにも要望を聞く形を取った。

## V. 考察

アンケート調査の結果では、属性は、小学校 4 年生から中学 2 年生までいるが、小学校 4 年生が 4 割を占めている。学校に行かなくなった理由であるが、何となくが 5 名 (45.5%) と一番多く、その他の者は、学校全体、クラス全体、クラスの一部の生徒との関係に課題を抱えている。学校に行かなくなった時の気持ちでは、普通 2 名 (18.2%)、特別感があって楽しい・体が無理と言っていたなどがそれぞれ 1 名 (9.1%) で、肯定的、否定的の両方の気持ちの中で、葛藤していることがわかる。また、FES の活動を通じてどう思ったかという問いには、とても良かった 8 名 (72.7%)、良かった 2 名 (18.2%) と 90%以上の児童生徒が満足している。さらに、

FES の活動を通じて、どのように感じましたかという問いには、楽しかった 7 名 (63.6%)、自信がついた 2 名 (18.2%) というように支援により、人とのかかわりに良い傾向を示し、また、自己肯定感が高まっていることが示唆された。

さて、このような肯定的な側面についてどのような点が影響しているのかをアセスメント項目 (表 2)、アセスメント情報 (表 3)、マッチングシート (表 4)、FES スタッフと保護者のやりとり (図 5)、業務報告書 (表 5) の特記事項から考察を行う。アセスメントには、不登校および登校しぶりの時期、発達障害の有無、趣味、ボランティアスタッフの希望する性別の項目がある。FES が不登校児童生徒および登校しぶりの児童生徒のこのよ

うなアセスメントの取得を可能にしているのは、不登校の親の会などの保護者からの紹介、HP からの問い合わせ、FES 利用者の口コミを中心とした児童生徒の受け入れを中心としていることが影響しているのだろう。そのようなアセスメントは、FES の機能や支援内容について一定の理解がある児童生徒・保護者であるがゆえに、事前に詳細なアセスメント情報を得た上で、かかわりをスタート出来ている。

アセスメントの特記事項で着目すべき点は、「学校に行けなくなってから人が怖くなり、ほとんど外出できない」「家に一人でいると罪悪感があるようだ」「本人が勉強したいと思っているようなら勉強をさせてあげたい」「少し上の高校生や大学生とコミュニケーションを取り、自信を付けて欲しい」「痩せているのを気にして細いと言われるのがコンプレックスである」という内容が

## VI. 結論

一般的な不登校児童生徒への支援で課題となっているのは、不登校児童生徒の変化に沿った支援計画の作成の中で、孤立感、不安感に寄り添うこと、人とのかかわりを段階的に進めることである。この点に関して、FES では、FES スタッフが保護者・不登校児童生徒とのやりとりを通じて分かったことを業務報告書により FES 事務局に報告することで、支援内容の見直しを行っている。また、FES スタッフの大学生は、心理学・社会福祉学、教育学を学んでいる学生であり、専門性を生かし支援内容を柔軟に調整している。報告・連絡・相談をしながら、より良い支援につながるように工夫を行っている。さらに、FES スタッフは、高

校生・大学生のボランティアスタッフであることから、年齢差が小さく「斜めの関係」<sup>注3</sup>として関係が深まりやすく、人間関係が＜つながり＞でなく異なる考えの＜ちがひ＞の存在を意識できる。そのことにより、その人間関係がいきいきとしたものになる<sup>8)</sup>。そういう意味では、人とのかかわりが、自信を深めながら段階的に広がっていく可能性を高める効用があることが示唆された。

ただし、限られたアンケート内容、FES の資料の一部の分析からの示された内容である。不登校児童生徒の支援の中で、FES の支援に不登校児童生徒への支援課題を埋める項目が多数含まれているものの、効果的であるとは言えない。そのため、今後は広範

あり、社会とのかかわりが難しいこと、そのために年齢の近い高校生・大学生とのコミュニケーション支援を希望していること、自己肯定感が低いことが伺える。

以上のような内容は、先行研究の課題とも重複するものがあり、通常の支援では、不登校児童および登校しぶりの児童生徒と支援者の年齢差が大きい FES の場合は、その年齢差が小さいことから、人とのかかわりのハードルが低いことが伺える。また、不登校児童生徒は、生活リズムが崩れやすくなりやすいため、FES では活動日時を柔軟に対応し、学習支援とコミュニケーション支援の時間配分を保護者の希望と児童生徒の希望の調整、学習の進捗状況に基づく時間調整を行いながら支援していくことは、段階的に自信を取り戻していくのに必要なアプローチ方法と言える。

囲のアンケート調査、FESの支援の継続的調査を行う必要があり、一般化するには至

## 注

注1: For Everyone Studyは、スタッフの多くが所属する茨城県BBS連盟(Big Brothers and Sisters movements)が対面で活動が出来なくなりことをきっかけに、オンラインでの学習支援活動を中心にして活動を開始した組織のことである。

注2. 登校しぶりは、他者からポジティブな評価をされないことにより自己評価が低くなり、そのような要因や障害等から引き起こされる現象として学校に行くのをためらっている状態を登校しぶりという。

注3: 斜めの関係とは、上下的タテ軸的、直系的な離れた「中立的な関係」のことをいう。そのような関係は、毎日学校に行っている友人たちや、先に行ってしまった友人たちの接近も恐怖である彼ら等に対して、近づき得る治療的な通路としての関係のことをいう。

## 引用文献

1) 文部科学省(2021)「令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等制度指導上の諸問題に関する調査結果の概要」

[https://www.mext.go.jp/content/20211118-mxt\\_syoto01-000019078\\_002.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20211118-mxt_syoto01-000019078_002.pdf)

(2025.9.1アクセス)

2) 独立行政法人教職員支援機構(2019)「教育機会確保法と不登校施策」

[https://www.nits.go.jp/materials/intramural/files/089\\_001.pdf](https://www.nits.go.jp/materials/intramural/files/089_001.pdf)(2025.9.1アクセス)

3) 文部科学省(2019)「不登校児童生徒への

らなかった。この点が研究の限界である。

支援の在り方について」

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm)82024.12.1アクセス)

4) 石井菜緒(2025)「問題行動に至る子どもへの支援に関する文献レビュー」

『2024年度聖路加国際大学大学院看護学研究科課題研究』1-31.

5) 森敬之・原和樹・森崎晃(2025)「教育支援センターにおける不登校児童生徒支援の現状と課題：実践事例の集約を通して」『椋山女学園大学教育学部紀要』18(1)、43-50.

6) 大川尚子・野谷昌子・鍵岡正俊・佐藤秀子・山本暎子・森川英子(2006)「学生の学習支援システムの構築2:電子メールによる不登校児童生徒支援」『関西女子短期大学紀要』15、13-20.

7) 木下一雄(2025)「児童生徒の不登校等に関するこれからの支援のあり方：無気力な児童生徒の急増と今後の行方」『旭川市立大学保健福祉学部紀要』Vol12、13-17.

8) 佐藤俊一(1997)「つながり文化における対人援助の可能性：日本人の人間関係と社会福祉援助技術」『鹿児島国際大学季刊社会学部論集』15(4)、84-85.

## 参考文献

1) 別府哲・坂本洋子(2005)「登校しぶりを示した軽度知的障害児における自己の発達と他者の役割」『心理化学』25(2).

2) 豊島秋彦(2004)「教員養成学の構造から見た不登校サポートと『斜めに関係』—対人専門職への社会化研究の実践的理論的意味」『弘前大学教育学部紀要』特集号、35.

## 国際介護福祉学研究センター年報：2025年度

### 1. 2025年度センター業務

2025年度も例年に続き、木曜日の昼休みの時間を利用してランチオンセミナーを開催した。

その他、各教員、学会発表や論文の投稿など積極的に業務をこなした。

### 2. 2025年度介護福祉学研究ランチオンセミナー発表要旨

- (1) 実施日・時間：2025年4月17日（木）  
12:10-12:50
- (2) 場所：831教室
- (3) 発表者：石鍋浩
- (4) 題目：(文献紹介) "Brain signatures of artificial language processing: evidence challenging the critical period hypothesis."
- (5) 要旨：Friederici, A. D., et al. (2002). Proc Natl Acad Sci U S A 99(1): 529-534. を紹介します。ヒトは幼児期の母語の獲得に困難を抱えることはありません。ところが、成人以降、第2言語習得には困難を抱え、習得に時間もかかります。なぜこのような現象が見られるのかについては、母語獲得の臨界期仮説 (critical period hypothesis) により説明されてきています。本文献における研究では、ERP (事象関連電位) を用い、人工言語 (BROCANTO) を学習した成人の文法処理過程を検討しました。その結果、ネイティブスピーカーによる自然言語処理と類似の反応が認められました。第2言語処理過程は母語の処理過程と異なるとする一般的な見解と異なる傾向が認められました。臨界期仮説を再考する必要性が示唆されました。

- (1) 実施日・時間：2025年5月1日（木）  
12:10-12:50
- (2) 場所：831教室
- (3) 発表者：傘郁子
- (4) 題目：糖は甘い？ 甘くない？
- (5) 要旨：『糖』という文字を目にすると、何を思い浮かべますか。お砂糖の甘い誘惑で、糖尿病、むし歯、肥満の原因をつくる！健康の敵だ！ と思っていませんか。ところが、糖はそんなに単純で大雑把な悪者ではありません。生命活動を営む上で重要な役割を担い、食品として摂取する糖は、生体を外部の化学物質からまもる可能性を

秘めています。その関連する分野は様々で、え！こんな分野にも関連しているのと驚きがいっぱいです。これら身近なやわらかい話題からご紹介いたします。

- (1) 実施日・時間：2025年5月29日（木）  
12:10-12:50
  - (2) 場所：831教室
  - (3) 発表者：久保田寛
  - (4) 題目：関西圏における介護福祉士による医療的ケア（喀痰吸引・経管栄養）の実態調査—基本研修を修了した介護福祉士を対象として—
  - (5) 要旨：医療的ケアの基本研修を修了した介護福祉士は介護現場における医療的ケアについてどのように思っているのかアンケート調査を実施して検証した結果、医療的ケアの基本研修を修了した教育機関と実地研修の修了には有意な関連は認められなかった。医療的ケアを行っている介護福祉士の内訳は医療的ケアを行っている介護福祉士と勤務先の施設の種類の有意な関連が認められなかったが、特養の割合が高かった。介護福祉士は、医療的ケアは医療職が行う仕事であると考える一方で、自身が医療の知識が不足していることや、事故発生時に責任が取れないなどの不安が、医療的ケアを行う必要がないと思う理由として存在することが示された。
- (1) 実施日・時間：2025年6月19日（木）  
12:10-12:50
  - (2) 場所：831教室
  - (3) 発表者：三木純
  - (4) 題目：介護福祉士養成校における日本人学生の学習意欲について - 多数の外国人留学生の中で学ぶとは -
  - (5) 要旨：介護福祉士養成校に入学を決意した日本人入学生の意識調査を行い、介護

福祉士を目指した理由や彼らが感じている介護福祉士の魅力を知ること、今後介護福祉士を養成する学校として行うべき教育や、社会に対する発信力も高めることができるのではないかと考える。さらには多くの外国人留学生と共に学ぶメリットやデメリットを、実際に体験している彼らから聞くことで、学生生活だけではなく、今後職場での外国人介護職との協働や連携についても有効なヒントが得られるのではないかと考える。今後も安定的に介護福祉士養成施設が存続していくためにも、それらの研究によって明らかにしたいという、研究計画についての報告を行った。

- (1) 実施日・時間：2025年6月26日（木）12:10-12:50
- (2) 場所：831教室
- (3) 発表者：山田克宏
- (4) 題目：人口減少地域におけるひきこもり支援の効果モデルの開発～A県B町の取組事例に対するプログラム評価の方法論を用いたモデル化の試み（続報）
- (5) 要旨：A県B町の分析から7カテゴリー、39のサブカテゴリーと49の効果的援助要素が抽出された。39のサブカテゴリーのうち10は既存文献、資料の整理をした項目から抽出された。

- (1) 実施日・時間：2025年9月25日（木）12:10-12:50
- (2) 場所：831教室
- (3) 発表者：石鍋浩
- (4) 題目：学生の文化背景と専門教育の有無が高齢者に対する顕在的態度と潜在的態度に与える影響
- (5) 要旨：介護専攻留学生と介護専攻日本人の高齢者認識を検討した研究では、文化背景によって高齢者認識が異なることが示されているが、専門教育の有無についての影響は不明な点が多い。本研究では、高齢者に対する顕在的態度調査と潜在的態度調査を実施した。顕在的態度調査を実施し、出身と専門教育の有無を要因とした分散分析を実施した結果、専門教育の主効果は、 $F(1, 110) = 5.106, p = 0.026$ であった。出身の主効果は、 $F(1, 110) = 33.808, p < 0.001$ で

あった。専攻と出身の相互作用は、 $F(1, 110) = 4.424, p = 0.038$ であった。高齢者に対する潜在的態度調査(IAT)を実施し、出身と専門教育の有無を要因とした分散分析を実施した結果、専門教育の主効果は、 $F(1, 110) = 0.206, p = 0.651$ であった。出身の主効果は、 $F(1, 110) = 3.619, p = 0.034$ であった。専攻と出身の相互作用は、 $F(1, 110) = 1.650, p = 0.202$ であった。専門教育のみでは、潜在的態度に影響を与えることは困難であることが示された。その他の要因の影響を考慮に入れる必要性が示唆された。

- (1) 実施日・時間：2025年10月2日（木）12:10-12:50
- (2) 場所：831教室
- (3) 発表者：山田 克宏
- (4) 題目：人口減少地域におけるひきこもり支援の効果モデルの開発～A県B町の取組事例に対するプログラム評価の方法論を用いたモデル化の試みなど～
- (5) 要旨：地域社会では、少子高齢化、人口減少、人間関係の希薄化による孤立の問題が社会問題化している。特に、人口減少地域では社会資源・人的資源の不足に伴い、生活や孤立の問題への対応が課題として突きつけられている。以上のことから、人口減少地域におけるひきこもり支援のあり方を模索していくことが喫緊の課題である。そのため、人口減少地域における地域づくりを通じたひきこもり支援の効果的要素を一般化するため、GP事例としてA県B町を取り上げ、既存文献・資料の整理、インタビュー調査による質的研究、プログラム評価、プログラム理論の考え方を用いて効果的援助要素を抽出し、効果的プログラムの開発の示唆を得ることを目的とする。今回の研究で、6カテゴリーおよび40のサブカテゴリーと52の効果的援助要素が抽出された。

- (1) 実施日・時間：2025年10月9日（木）12:10-12:50
- (2) 場所：831教室
- (3) 発表者：登り山和希
- (4) 題目：九州域内における外航クルーズ寄港の現状と課題

(5) 要旨：訪日クルーズ観光客の増加に伴い、地方都市での寄港地観光の充実が課題となっている。宿泊を伴わないクルーズ客は観光や文化体験の機会が少なく、免税店訪問に終始しがちである。さらに、近年は二次交通の不足が地方寄港地の魅力低下を招き、クルーズ船社に選ばれなくなる懸念もある。こうした状況を踏まえ、上質な寄港地観光をどう造成していくかについて、現状と課題を交えて検討を行う。

(1) 実施日・時間：2025年10月23日（木）  
12:10-12:50

(2) 場所：831 教室

(3) 発表者：傘郁子

(4) 題目：身近な危険生物

(5) 要旨：身近な危険生物、特に「ハチ」に注目します。ハチに刺されることで、2020年から2024年まで計87人、年平均で約17.4人が死亡しています（厚生労働省の人口動態調査による）。攻撃を受けやすい色彩と身なり・行動は次です。

1.黒色に対して激しく攻撃する。2.ヘアスプレー、香水などの化粧品、体臭、汗などにも敏感に反応する。Ono,M. et al, Componentsof giant hornet alarm pheromone, Nature 424 637-638, 2003. スズメバチの毒の中に、仲間へ危険を知らせて集まらせる「警報フェロモン」が含まれていて、主な成分は「2-ペンタノール」、他の2つの成分（「3-メチル-1-ブタノール」と「1-メチルブチル 3-メチルブタン酸エステル」）と組み合わせることで効果が強くなります。これらの成分は食品や化粧品の香料として使われることもあり、人が知らないうちにハチを刺激して攻撃される可能性があります。

(1) 実施日・時間：2025年10月30日（木）  
12:10-12:50

(2) 場所：831 教室

(3) 発表者：馬込武志

(4) 題目：迷惑かけてはいけませんという文化装置

(5) 要旨：「迷惑かけてはいけません」とはよく言われることですね。逆に他人に迷

惑をかけなければ何をしてもよいという主張の裏返してして使われます。前々から「他人に迷惑をかけなければ何をしてもいいのか？そんなことはないだろう」と思っていました。その根本になる「迷惑をかけてはいけません」という考え方そのものに興味をもっていました。最近、読んでいる『迂回する経済の都市論』にそのことに関するヒントがありました。そこから「迷惑かけてはいけません」のしくみを仮説ですが、考えてみましたのでご報告いたします。

(1) 実施日・時間：2025年11月20日（木）  
12:10-12:50

(2) 場所：831 教室

(3) 発表者：伊藤美加子

(4) 題目：『においと認知症のこと』

(5) 要旨：嗅覚障害と認知症に深い関係があることが多くの研究でも報告されています。今回はその研究をされている鳥取大学の河月稔先生の論文を紹介します。

(1) 実施日・時間：2025年11月27日（木）  
12:10-12:50

(2) 場所：831 教室

(3) 発表者：山田克宏

(4) 題目：人口減少地域におけるひきこもり支援の効果モデル：A 県 B 町の取り組み事例に対するプログラム評価の方法論を用いたモデル化の試みなど

(5) 要旨：ひきこもり状態の方の人数は、増加傾向で推移しており、Good Practice 事例を調査し、社会プログラムを設計・開発することが必要である。本研究では、GP 事例として A 県 B 町を取り上げ、プログラム評価、プログラム理論を用いて整理を行う。

(1) 実施日・時間：2025年12月4日（木）  
12:10-12:50

(2) 場所：831 教室

(3) 発表者：山田克宏

(4) 題目：人口減少地域におけるひきこもり支援の効果モデル：A 県 B 町の取り組み事例に対するプログラム評価の方法論を用いたモデル化の試みなど

(5) 要旨：ひきこもり状態の方の人数は、増加傾向で推移しており、Good Practice

事例を調査し、社会プログラムを設計・開発することが必要である。本研究では、GP事例としてA県B町を取り上げ、プログラム評価、プログラム理論を用いて整理を行う。

人口減少地域は、一般的に人的資源・社会資源が不足する傾向にある。また、ひきこもり状態の方は、関係の貧困状態に陥っており、制度上は狭間の問題のため、なかなか支援が届きづらい現状がある。しかし、A県B町では、人的資源としてひきこもり状態の方、高齢者も支えられる側から支える側に変容できるように「こみっと」「プラチナバンク」等の場により確保している。また、人とのかかわり、社会的役割の再取得が促進されている。さらに、ひきこもり状態の方には、伴走型支援によりひきこもりの背景要因に応じたタイムリーで、ひきこもり状態の方が気持ちの発露がしやすい環境の整備、支援がなされている。このような取組により、113名いたひきこもりが、27名程度まで減少しており全世代が活用できる地域づくりが行われ、ひきこもり状態の方にとって生活しやすい地域となっていることが明らかになった。

(1) 実施日・時間：2025年12月11日（木）

12:10-12:50

(2) 場所：831 教室

(3) 発表者：三木純

(4) 題目：「自閉症は津軽弁を話さない」

(5) 要旨：妻の「自閉症は津軽弁を話さない」という一言をきっかけに、松本敏治さんは「自閉症と方言」をテーマに10年にわたり研究を行いました。本書は、自閉スペクトラム症（ASD）の言語的特徴を「方言」という視点から捉え、その成果を分かりやすくまとめたものです。なぜ方言が使われにくいのかという問いに対して、多角的に考察されており、非常に興味深い内容だったため、ここに紹介します。

(1) 実施日・時間：2026年1月8日（木）

12:10-12:50

(2) 場所：831 教室

(3) 発表者：山田克宏

(4) 題目：人口減少地域におけるひきこもり支援の効果モデル：A県B町の取組み事例に対するプログラム評価の方法論を用いたモデル化の試みなど

(5) 要旨：本研究では、GP事例としてB町を取り上げ、既存文献・資料の整理、インタビュー調査による質的研究、プログラム評価、プログラム理論の考え方を用いて効果的援助要素を抽出し、効果的プログラムの開発に発展させるための示唆を得ることを目的とする。

分析の結果5カテゴリー、34のサブカテゴリーが抽出された。そして、効果的援助要素として「誰もが共に暮らせる支援体制の形成」「誰もが活躍できる地域づくり」「保健師による心の健康支援」「就労体験等により仕事のイメージができる取組」などの効果的援助要素が抽出できた。

### 3. 2025年度センター所属教員研究業績

#### 3.1. 学会発表

- ・石鍋造, 野口代, 梓川一. 介護福祉専門教育と文化背景が高齢者に対する潜在的態度に与える影響: 留学生と日本人学生を対象に. 日本教育工学会研究会 2025年7月5日
- ・石鍋造, 野口代, 梓川一. 学生の文化背景と専門教育の有無が高齢者に対する顕在的態度と潜在的態度に与える影響. 第33回日本介護福祉学会大会 2025年9月7日
- ・北島ちよ子. 福岡県のA宅老所のよりよい介護とは. 第33回日本介護福祉学会大会 2025年9月7日

#### 3.2. 論文

- ・石鍋造, 安龍洙, 松田勇一, 全成燁, 朴寶根. 留学生による異文化相互理解の認識に関する質的研究. 宇都宮共和大学シティアイフ学研究, (26), 24-41, 2025
- ・石鍋造, 安龍洙, 松田勇一. 大学生の韓国語短期研修に対する捉え方: COVID-19感染拡大前、感染拡大中、感染拡大収束後の3フェーズの研修後のレポートの比較. 留学生交流・指導研究, (28), 2026, 印刷中
  - ・伊藤美加子, 藤田杏純実, 後藤彰彦. 『食事介助動画を使用した介護職員による注視点計測研究』 東大阪大学短期大学部国際介護福祉学研究センター論文誌「多文化と介護」Vol. 3 2026年3月発行予定
- ・山田克宏. 「子ども分野」での支援者の記録における必要要素: 家族支援を包含した記録の一考察. 東大阪大学・東大阪短期大学部教育研究紀要, (22), 60-70, 2024
  - ・山田克宏, 植竹智央. 不登校児童生徒および保護者への支援内容の評価: For Everyone Studyのアンケート調査、活動資料の分析から 多文化と介護 Vol. 3 2026年3月発行予定
- ・傘郁子. 生物学講義内容に対する留学生の関心について- 2 - アンケート調査-. 東大阪大学短期大学部国際介護福祉学研究センター論文誌「多文化と介護」Vol. 2 印刷中
- ・傘郁子. 伝統的バランス食を複雑系のまま捉える指標変換型評価方法の開発- 1. - 計算 1H-NMR スペクトルからのアプローチ (果物) - 東大阪大学・東大阪短期大学部教育研究紀要 第23号 36-54 2026年3月発行予定
- ・傘郁子. 介護福祉学科における生物学教育の意義と共通言語としての日本語の役割. 東大阪大学短期大学部国際介護福祉学研究センター論文誌「多文化と介護」Vol. 3 2026年3月発行予定

#### 3.3. 著書

なし

### 3.4. 講演

- ・ 伊藤美加子. 奈良県介護福祉士実務者研修講師 2025年10月から11月中の計4回
- ・ 伊藤美加子. 令和7年度東大阪市民生委員児童委員研修会 講師 2026年2月21日
- ・ 山田克宏. 第13回大阪社会福祉士学会、第一分科会 実践報告会・自由研究発表、座長、2015.11.15
- ・ 山田克宏. 令和7年度基礎研修講師「実践研究の意義と方法」2025.11.30.

### 3.5. その他研究活動 (獲得した研究費など)

- ・ 石鍋浩 (研究代表者), 野口代 (研究分担者). 外国人による高齢者虐待に対する認識の解明. 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究 (C), 23K00622. 2023年4月 - 2025年3月
- ・ 安龍洙 (研究代表者), 石鍋浩 (研究分担者). 多文化共生社会の意識に関する研究. 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究 (C), 23K00601. 2023年4月 - 2025年3月
- ・ 伊藤美加子, 山田克宏, 傘郁子. 認知症サポーター養成講座 東大阪大学・東大阪大学短期大学部 公開講座 2026年1月17日

# 投 稿 規 定

## 1. 論文誌名と発行時

東大阪大学短期大学部国際介護福祉学研究センターは、逐次刊行物として論文誌「多文化と介護」を年 1 回発行する。

## 2. 投稿資格

・投稿者のうち、少なくとも 1 人は東大阪大学・東大阪大学短期大学部専任教員あるいは非常勤教員であること。

・東大阪大学・東大阪大学短期大学部専任教員あるいは非常勤教員以外で、編集委員会が投稿を妥当と認めた者。

## 3. 論文種別

以下のカテゴリを設ける。

### 3.1. 原著論文

多文化と介護に関係のある研究成果について、科学的な根拠に基づき論理的に明瞭に記述したもの。原著論文はオリジナリティーのある未発表のものに限る。

### 3.2. 研究ノート

多文化と介護に関係のある研究成果について、科学的な根拠に基づき論理的に明瞭に記述したもの。研究ノートは、今後の発展性が期待されるものも含む。

### 3.3. 実践研究

多文化と介護の実践及び教育に寄与するもの。今後の実践や教育の改善に対して新たな視点が期待されるもの。一定の客観性が認められれば、原著論文のオリジナリティーは必要としない。

### 3.4. 資料

調査結果、教育資料、施設における記録の一部など、多文化と介護の今後の発展や介護現場の発展と改善に寄与すると考えられるもの。

### 3.5. その他

編集委員会は、寄稿論文を依頼することができる。また、編集委員会は、特集を組むことができる。

## 4. 投稿の条件

4.1. 倫理面：日本学術会議の声明「科学者の行動規範－改訂版－」を十分に理解していること (<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-s168-1.pdf>)。以下の項目については、投稿の際に執筆者および共同研究者の責任のもと再度確認すること。

- ・ヒトおよび動物を対象としている研究は、事前に関連する倫理委員会にて審査し、承認を受けていること。審査を受けた倫理委員会名と承認年月日・承認番号などを本文中に記載すること。
- ・投稿時の営利を目的とする団体や企業に関わる利益相反状態を開示すること。
- ・二重投稿でないこと。
- ・捏造、改ざん、盗用がないこと。
- ・著作権の侵害がないこと。
- ・人権の侵害がないこと。

## 5. 査読

投稿論文は編集委員会で査読を行い、以下 A～D のカテゴリで判定する。

- A. 採択
- B. 軽微な修正の後採択
- C. 大幅な修正の後採択
- D. 再投稿

## 6. 著作権

論文誌に掲載される原著論文、研究ノート、実践研究、資料の著作権は、国際介護福祉学研究センターに帰属する。よって、論文、資料、研究開発レター、誌上討論の投稿にあたって、著者は、日本国著作権法第 21 条から第 28 条までに規定されたすべての権利を本会に譲渡することを投稿時に同意しなければならない。

以上

## 執筆規定

1. **原稿の仕様** 原則としてワープロソフトを用い、フォーマットに従い原稿を提出すること。
2. **提出原稿** 提出原稿は電子ファイルにてA4判とし、表紙には論文種別、論文表題(和文と英文)、執筆者名・所属(和文と英文)、代表者の連絡先(電話番号を含む)を明記すること。なお、論文採択後にも電子ファイルを提出する。
3. 論文種別は、下記の表の通りとする

論文種別	内容	文字数制限
原著論文	多文化と介護に関係のある研究成果について、科学的な根拠に基づき論理的に明瞭に記述したもの。原著論文はオリジナリティのある未発表のものに限る。	20,000 文字(図表込みで、引用文献を除く)。図表は600字換算とする。
研究ノート	多文化と介護に関係のある研究成果について、科学的な根拠に基づき論理的に明瞭に記述したもの。研究ノートは、今後の発展性が期待されるものも含む。	15,000 文字(図表込みで、引用文献を除く)。図表は600字換算とする。
実践研究	多文化と介護の実践及び教育に寄与するもの。今後の実践や教育の改善に対して新たな視点が期待できるもの。一定の客観性が認められれば、原著論文のオリジナリティは必要としない。	10,000 文字(図表込みで、引用文献を除く)。図表は600字換算とする。
資料	調査結果、教育資料、施設における記録の一部など、多文化と介護の今後の発展や介護現場の発展と改善に寄与すると考えられるもの。	10,000 文字(図表込みで、引用文献を除く)。図表は600字換算とする。

4. **図表など** 白紙に黒色インクで明瞭に書かれたものを用い、写真を用いる場合は鮮明なものを提出すること。表や図の番号は表1、図1のように記入し、図表のタイトルをつける。
5. **和文要約** 目的、方法、結果、結論の概要をほぼ把握できるように、和文で400字以内の要約と3～5項目の和文キーワードを記載する。
6. **脚注は原則として認めない。**
7. **印刷形式** 印刷の体裁は編集委員会に一任する。
8. **表記** 新かなづかい、常用漢字、算用数字を用いること。外国人名・地名等の固有名詞以外はなるべく訳語を用い、必要な場合は初出の際にだけ原語を付す。
9. 文献の記載は、日本語、外国語を問わず引用順に番号を付けて記載すること。また、本文中の引用箇所には肩番号を付けること。  
(例) 佐藤は、〇〇について「・・・」と述べている<sup>1)</sup>。
10. 引用文献の表記については、次のように日本介護福祉学会の『「介護福祉学」執筆要領』に従い、記述すること。
  - (1) 和文の文献
    - a. 単著の書籍の場合  
著者名(出版年)『書名(タイトル—サブタイトル)—』出版社名, 初頁-終頁。  
(例) 佐藤一郎(2023)『介護福祉学の今後—福祉と多文化—』〇〇出版, 18-20.
    - b. 雑誌論文や紀要論文の場合

著者名 (出版年)「論文タイトル」『雑誌名』巻 (号) , 初頁-終頁.

(例) 佐々木次郎 (2017)「学内実習が学生の心理面に与える影響」『〇〇学雑誌』25 (2) , 61-69.

鈴木良子・高橋三郎 (2010)「わが国の介護人材の推移」『〇〇研究』(△△介護福祉大学)12, 12-27.

・3名を超える著者については, 3名まで連記し, それ以上は「他」で表記する.

・雑誌や紀要の巻・号については, 例えば第25巻第2号を25 (2) というように表記する. また, 巻や号のみの場合は, 例えば第25巻を25と表記する.

c. 翻訳書の場合

原典の書誌情報. (= 訳本の出版年, 訳者名『書名 (タイトル —サブタイトル—)』出版社名)

(例) James, I. A. (2011) *Understanding behaviour in dementia that challenges: A guide to assessment and treatment*, Jessica Kingsley. (= 2016, 山中克夫 監訳『チャレンジング行動から認知症の人の世界を理解する: BPSD からのパラダイム転換と認知行動療法に基づく新しいケア』 星和書店)

d. 電子メディア情報の場合

著者名 (公表年又は最新の更新年)「タイトル —サブタイトル—」URL (最終アクセス年月日)

(例) 厚生労働省 (2022)「第23回生命表 (完全生命表) の概況」

chrome-extension://efaidnbmnribpcajpcglclefindmkaj/https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/23th/dl/23th-11.pdf (2023.1.31)

(2) 欧文の文献

a. 共著の場合

ファーストオーサーのファミリーネーム, ファーストネーム, ミドルネーム and 共著者のファミリーネーム, ファーストネーム, ミドルネーム (出版年) 書籍のタイトル: サブタイトル, 出版社名, 初頁-終頁.

(例) James, I. A. and Gibbons, L. (2019) *Communication skills for effective dementia care*, Jessica Kingsley Publishers, 15-16.

b. 編著の場合

編者のファミリーネーム, ファーストネーム, ミドルネーム, ファミリーネーム, ファーストネーム, ミドルネーム and ファミリーネーム, ファーストネーム, ミドルネーム eds. (出版年) 書籍のタイトル: サブタイトル, 出版社名, 初頁-終頁.

(例) Reid, W. J., Batson, C. D. and Smith, T. A. eds. (2016) *Attitudes of Older Adults about Community-Based Services*, Oxford University Press, 4-27.

c. 雑誌に掲載されている論文の場合

著者のファミリーネーム, ファーストネーム, ミドルネーム (出版年) 論文のタイトル: サブタイトル, 雑誌名 巻や号, 初頁-終頁.

(例) Lyketsos, C.G., Steinberg, M., Tschanz, J.T. et al. (2000) Mental and behavioral disturbances in dementia: findings from the Cache County Study on Memory in Aging. *American Journal of Psychiatry*, 157 (5), 708-714.

・3名を超える著者については, 3名まで連記し, それ以上は「et al.」で表記する.

11. その他の執筆に関する詳細は, 日本介護福祉学会の『「介護福祉学」執筆要領』に従うこと。

本規定は日本介護福祉学会学会誌『介護福祉学』執筆要領を参考に作成しました。

## 多文化と介護 Multiculture and Social Care

---

Vol. 3

2026年3月31日発行（年1回3月発行）

編集集：東大阪大学短期大学部国際介護福祉学研究センター論文誌「多文化と介護」  
編集委員会

編集委員：石鍋 浩・伊藤美加子・傘 郁子・砂田貴彦・馬込武志・三木純・山田克宏

発行：東大阪大学短期大学部国際介護福祉学研究センター

〒577-8567 大阪府東大阪市西堤学園町 3-1-1

TEL: (06)6782-2824（代表）

FAX: (06)6782-2896

E-mail: [research\\_sc@higashiosaka.ac.jp](mailto:research_sc@higashiosaka.ac.jp)

<https://www.higashiosaka.ac.jp/isc/>

本誌の無断複写・転載は、著作権・出版権の侵害となることがありますのでご注意ください。

# MULTICULTURE AND SOCIAL CARE

---

## CONTENTS

### Roundtable Discussion

Training and Challenges of Foreign Care Workers: Perspectives for 2025  
Takumi URABE, Takahiro, MAKI, Ryota OKUDA, Takanobu MIZUGUCHI, Takeshi MAGOME,  
Ikuko KARAKASA, Mikako ITO, Hiroshi ISHINABE——1

### Original Articles

A study on gaze points measurement using video of meal assistance scene in nursing home

Mikako ITO, Akihiko, Asumi FUJITA——22

### Practical Research

The Significance of Biology Education in Care and Welfare Studies  
and the Role of Japanese as a Common Language

Ikuko KARAKASA——36

### Technical Information

Evaluation of support for homeschooled children and their guardians: Findings from  
the For Everyone Study questionnaire survey and analysis of activity materials

Katsuhiro YAMADA——45

### Annual Report

——54